



2003 年度総会
北海道の労働と福祉を考える会

2004 年 3 月 7 日 18:00~
札幌市民会館

2003 年度 総会資料目次

1. 今年度の活動概要・・・・・・・・・・・・・安部 薫道
2. 生活健康相談会報告・・・・・・・・・・・・・椎名 結実
3. 札幌市と共催した「炊き出し・健康相談会」について
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 安部 薫道
4. 生活保護申請同伴報告・・・・・・・・・・・・・寺嶋 祐一
5. 他団体・機関との連携について・・・・・・・・・・・・・佐々木 宏
6. 会計報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・寺嶋 祐一
7. 今年度の課題と来年度の活動・・・・・・・・・・・・・安部 薫道
8. 「私と労福会」
9. 来年度の役員紹介

- ※資料～
- ①2003 年度夏・冬の人数確認調査報告
 - ②「炊き出し・総合相談会」で札幌市と合同で行ったアンケートの結果

1. 今年度の活動概要

身を切るような氷点下の夜、毛布ひとつで路上にうずくまる当事者。雪の降りしきる中、廃棄食品を求めてどこまでもさ迷い歩く当事者。彼らの中には命の危険すら差し迫っている方もおり、現に今年度も餓死の事例が挙がっています。彼らは昨日までスーツを着て会社で働く身であったり、建設現場で機械を操る身であったりしたのです。それにもかかわらず、この不況の時代にさまざまな理由で路上生活を強いられるにいたってしまったのです。私たちはこのような深刻極まりない現状を目の当たりにし、これでいいのだろうか？少しでも何かできないだろうか？という発想から微弱ではありますが活動を立ち上げ、たくさんの方がご尽力くださったおかげさまで今年、発足から5年を迎えることができました。

さて、この5年の間、私たちは当事者の「脱路上」のために何をすべきか、何ができるかを考え続けてきました。そして試行錯誤しながら行ってきた活動は経験として蓄積してきました。今年度はこのような経験を活かし、以下のような活動を行ってきました。

第一に、全4回の生活健康相談会を開催しました。暖かい屋内で毎回100人前後の当事者に、食事や生活物資、健康相談、生活相談などのサービスを提供しました（参照：生活健康相談会報告）。第二に、保護同伴を行いました。当事者が役所へ保護申請をしに行くにあたり希望する方にスタッフが付き添うという活動です。この点、役所への同伴のみならず、病院、家探し、各機関・施設など当事者のニーズに可能な限り答える形で付き添いを行いました。今年度は役所への保護同伴だけで70ケース以上の実績を上げ、多くの当事者につき保護受給が決定しました（参照：生活保護申請同伴報告）。それから第三に、随時夜回りを行いました。これは2ヶ月に1度のペースでしか開催できない生活健康相談会の「間の期間」も日常的に当事者と関わりを持ちつづけるためであり、また、健康面など緊急対応が必要な当事者を放置しないためという意味も持ちます。第四に、日ごろの活動に活かすために2回の学習会を行いました。テーマは生活保護、それから「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法（自立支援法）」に基づく基本方針にそれぞれ設定し、制度の理解・問題点に関する考察を深めました。第五に札幌市保護課との懇談会（行政懇談会）を2回もちました。ここでは、路上生活者に関わる問題の所在を明らかにし、その解決のために適正に法を運用し、必要な措置を講ずるよう促しました（参照：他団体・機関との連携について）。

以上のように、ここ数年私たちが行っている基本的な活動を今年度も継続して行ってきたわけですが、ここで強調したいのが、今年度は行政に動きがあったということです。そしてその象徴として行政懇談会の中で案が浮上した街頭相談が、市と私たち市民団体共催の「炊き出し・総合相談会」という形で初めて実現しました。行政が動き出したのは昨年秋に出された「自立支援法」に基づく基本方針の影響が考えられますが、私たちはこうい

った行政の姿勢を評価し、経験・立場を活かして具体的施策を提言する役割を担っていくことになるでしょう（参照：炊き出し・総合相談会報告）。

さて、今年度は旭川・函館で支援がスタートした年でもありました。現地の支援関係者との連携、ノウハウの共有が来年度期待されます。

ところで、ここ数年いわれている居宅生活者問題に関してですが、まずは一斉に年賀状を送付することでアクセスを試みました。これは、脱路上後の居宅生活者の状況を把握するための第一歩として、まずはここ数年整理されていなかった住所録を更新するという意味、それからこちらの関心が持続して向いていることを知らせ、これからの関係づくりのきっかけにするという意味がありました。中には深刻な生活状況を知らせる返事をくださった方もおり、問題の難しさを実感しました。

このように今年度を振り返ってみると、会の活動は拡大し、社会的役割・期待も増大してきていることが分かります。多くの課題に関しては後ろの各パートに譲るとして、当事者のために会の活動を充実させてくれたのは特別擁護老人ホーム静山荘さん、民主医療連合（民医連）など各団体の並々ならぬ真摯な姿勢で役割を分担してくださっている団体のおかげさまです。また、名前を挙げずとも日ごろご尽力くださっている各団体の方にも改めて御礼を申し上げます。

2003年度の活動内容報告

- | | |
|-------|------------------|
| 5月9日 | 第1回学習会 |
| 5月18日 | 生活健康相談会① |
| 7月1日 | 会報「ともに生きる」No.7発行 |
| 7月5日 | 人数確認調査 |
| 7月19日 | 生活健康相談会② |
| 7月29日 | 第2回学習会 |
| 7月31日 | 札幌市保護課との懇談 |
| 9月25日 | 札幌市保護課との懇談 |

9月27日 旭川出張炊き出し

10月1日 会報「ともに生きる」No.8 発行

10月19日 炊き出し・総合相談会

11月15日 生活健康相談会③（健康診断結果の受け渡し）

12月13日 人数確認調査（市と合同）

12月21日 年越し夜回り

1月1日 居宅生活者に年賀状一斉送付

1月1日 会報「ともに生きる」No.9 発行

1月24日 生活健康相談会④（健康診断の結果受け渡し）

3月7日 2003年度総会 ※この他、随時夜回りを行いました。

2. 生活健康相談会

今年度は、資料に示す通り全部で4回の「生活健康相談会」、及び札幌市との共催で「炊き出し総合相談会」、旭川での相談会各一回を行いました。（「炊き出し総合相談会」については8ページで別途扱いますので、ご参照ください。）

全体的には、どの回も当事者に迷惑をかけるような大きな混乱はなく、スムーズに実施できました。以下では項目ごとに今年度の相談会を総括したいと思います。（参照：12ページ表）

1. 生活健康相談会の意義について

まず、相談会の目的についてですが、「当事者に温かく、安心して休める場を提供するため」「生活に必要な物資を渡すため」「健康に関心を持ってもらう機会」「今後、労福会とつながっていくためのコミュニケーションの場」「市民に活動をアピールするため」などでした。これらの目的は毎回の相談会でほぼ達成されていたように思います。また、相談会は当事者にとっても好評であり、開催するたびにそのニーズを強く感じました。

一方で支援者自身は、労福会のさまざまな活動の中で相談会がどのような位置を占めるべきだろうかといったことはあまり意識してこなかったと思います。しかし今年度も終わりに近づいてきたころ、当事者のニーズ全てに応えるには人もお金も足りないということをそれぞれが活動する上で実感するようになってはじめて、相談会や支援の目的を考えるようになったと思います。

そして労福会設立当初とは異なり、札幌市内にいくつかの支援団体が設立された今、労福会が果たしうる、そして果たすべき役割をとらえ直す時期に来ているのだらうと思います。今年度の相談会は、10月の札幌市との共催を除いては特に画期的なことはありませんでしたが、毎回できるだけ当事者のニーズをくみ取って、定期的に、そして大規模に開催したという点で、当事者・市民・札幌市の労福会への信頼を高めたものだったと言えるでしょう。

2. 当事者の参加数

今年度の参加数は、夏場において昨年を上回る数字を残しました。（参照：12ページ表）私たちが昨年に引き続き今年も生活保護希望者の脱路上をサポートしているにもかかわらず、相談会の参加者が増えています。それは第一に、札幌にいる当事者の人数が減っていないという現状、第二に、すでに野宿から居宅に移った方も相談会に訪れていること、第三に、労福会の脱路上サポート実績を聞いて、今まで相談会に来なかった当事者が来るようになったこと、この三点が原因として言えるのではないかと思います。

まず、第一の点については巻末の資料①から分かるように、札幌市内で野宿する当事者の人数が昨年と変わっていないためです。一方で、少なくとも脱路上した方の数は増えていると言えるでしょう。

次に第二の点については、路上から居宅に移った人の中でも、保護受給の生活では苦しいという理由で物資をもらいに来る方や、路上生活を続ける仲間と一緒に来る方がいらっしやいます。しかし、私たちは支援の対象を路上生活者だけではなく、ほとんどそれに近い生活をしている方も含め

て考えているため、彼らを相談会の場から追い出すことはしませんでした。なぜなら居宅に移った方が再び路上生活に戻ったり、微罪を犯して日常生活ができなくなったり、というケースがあるからです。私たちはそういうケースに触れるたびに、住む場所が路上か家か、だけでは計れないホームレス問題の深さを感じます。

最後に第三の点については、「友達が労福会に行ったら、アパートに住めた」という話を聞いて、初めはだめだと思っていたけれど生活保護を希望した、という方々がいらっしゃいました。これは、労福会がだんだんと当事者の信頼を得てきた結果だと思えます。しかし同伴希望者が増加することによって、サポートする一部のメンバーの負担が大きくなるという問題にもつながってきました。

3. 相談会の内容について

●物資配布について

今年度の配布物資・配布方法ともに、昨年度のやり方を受け継ぎました。相談会での配布物資は、当事者のニーズに沿ったものであり、当事者の生活自体に変化がない限りは当分必要とされるものばかりだろうと思います。具体的には、風呂券、歯ブラシ、タオル、石鹸、靴下、缶詰、ヒゲそり、おにぎり、豚汁、衣料品を配布しました。

風呂券は、北海道公衆衛生浴場協会が発行しているもので、同協会に加盟している銭湯ならどこでも入浴できます。予算と時期に応じて、毎回1～2枚配布しました。

おにぎり・豚汁は1月の相談会を除いて昨年と同様、静山荘さんの調理室の方々に作っていただきました。1月に自分達で雑煮を作って実感しましたが、静山荘の方に作っていただいたものはとても美味しく、毎回快く引き受けていただいて本当にありがたいと思えました。

衣料品についてですが、今年度は、寄付で頂いた衣料品が配りきれずに余ってしまったり、労福会の保管場所がいっぱいになってしまって寄付をお断りするなどの状況が生まれました。被災地に送られた衣料品が余りにも多すぎて自治体が処理に困っているなどのニュースを聞くと、今後の衣料品寄付の扱いをどのようにするかを会として改めて考えるべきだと思います。

●生活相談について

相談会では、労福会とのコミュニケーションも兼ねて、企画に来た当事者に「最近どう?」「どこか調子悪いところはない?」などと声をかけます。そこから、世間話でもいいし、何らかの関わるきっかけが生まれればよいと考えています。実際に、そういった声かけから、当事者が抱えている様々な問題を持ちかけられることや、健康相談を勧めたら病気が見つかった、などの事例があります。

これも昨年同様に行いましたが、今年度は、特に生活保護を勧めたわけではないのに当事者が自分から保護相談、同伴を希望してくるといった特徴が見られました。これは労福会のこれまでの活動に、当事者が信頼を持ち、生活保護なら労福会に相談しようといった考えが広がってきているためではないかと思えます。

●健康相談について

5月・7月の相談会では労福会副代表の芳賀医師に、10月・11月・1月の相談会では勤医協の医師にボランティアで診察にあたってくださいました。

11月の相談会は、前の月に大々的に健康相談会を開催したこともあって少なめでしたが、他の回は10名を超える相談者でした。その中には高血圧・糖尿病から精神疾患まで、さまざまな疾患が見出され、緊急性の高い方については会のボランティアが同伴して、生活保護申請のサポートにあたるように連携をとりました。特に1月の相談会では同伴希望者15名中13名が健康上緊急性を抱えた方で、札幌の冬を屋外で暮らす人の健康状態は相当ひどいものだとの印象を受けました。

札幌のホームレス支援の中で、労福会の相談会は今のところ唯一健康相談のために医師が出てくれる場なので、毎回きちんと健康相談を行う意義は高く、また、受診者が増えてきているのも当事者が健康に関心を持つようになってきた証しかと思っています。このためか、今年度は「急に具合が悪くなって…」と事務局に電話が入るなど、「飛び込み」の同伴依頼が増えました。

●その他のコーナーについて

① 散髪

今年度初めてのコーナーとして、散髪企画があります。これは、当事者から散髪の要望が高かったことから始めることになりました。実施するにあたって、労福会メンバー、元美容師のボランティア・民医連さんから紹介していただいたプロの理容師の方など多くの方の協力を得て、7月と1月の2回、相談会の中で実施することができました。

実際に行ってみると、その需要は予想よりも高く、時間がなかったために全員の散髪ができなかったこともありました。「だらしが無い」「汚い」などのイメージを抱かれやすい路上生活者ですが、ヒゲそり・風呂券などと並んで散髪にも多くの人が並ぶなど、方法さえあれば清潔にしたいと当たり前のように思っているのがよく分かりました。そのため、散髪企画は今後も続けていきたいと思えます。

② 生活保護相談

11月、1月の相談会では、座っている当事者のところへメンバーが話に行く生活相談とは異なり、ある程度知識を持ったメンバーが対応するコーナーを新たに設けました。この生活保護相談のコーナーは当初予想していたよりも多くの当事者が相談を持ちかけ、その内容も生活保護・年金・借金など複雑なものが多かったように思います。

このコーナーから同伴約束へうまくつなげなかったのが今年度の反省点ですが、この反省を生かしてぜひこれからも続けていってほしいと思えます。

③ マッサージ

11月の相談会で道視覚障害者協議会の方を呼んでマッサージをして頂きました。あいにくとあまり需要は高くなかったようですが、マッサージを受けた当事者の評判は上々で、続けていくうちに希望者も増えていくのではないかと思います。会場に余裕がある際には、お願いしてみるとよいと思えます。

④ お楽しみ・ゲーム

1月には、今年度初めてのお楽しみ企画、ゲームコーナーを設けました。会のメンバー

が楽しんで相談会をできるようにしたいとの思いで、射的・輪投げ・ストラックアウト・じゃんけん等のゲームを準備しました。

当日は、参加者の半数の当事者がゲームを楽しむなど予想以上のにぎわいを見せました。準備に多少手間のかかる企画ですが、やる気と人手のある限り、やってみるといいと思います。

4. 支援者としての参加について

労福会に、あるいはホームレス支援に何らかの興味を持った方は、その多くが相談会にボランティアとして参加します。

今年度は、毎回3、40名の支援者が会場に来られました。その中には、毎回企画の当日にのみ参加する人から、準備からその後の同伴までずっと関わる人、初めて来て、これからどう関わるか考えようと思っている人まで様々です。支援者にとって相談会は、(少なくとも今年は)活動の目玉であり、また誰もが気軽に参加できる開かれた場でもありました。そして、当事者が笑ったり喋ったりしているのを身近に見るということ自体がめったにない経験なので、会場があふれない限りはできるだけ多くの支援者が相談会に来るといいと思います。なぜなら相談会は、ホームレス問題を市民へ直接アピールをできる数少ない場であると考えからです。

しかし相談会に多くの支援者が集まる一方で、相談会の事前準備や、事後同伴になると必要な人手が足りず、少数のメンバーに負担が集中しているという現状があります。

また、今年度は学生、市民、医師、理容師、弁護士、ソーシャルワーカー、按摩、代議士、教会、そして札幌市など、非常に様々な人・団体が相談会に支援者として関わるようになりました。相談会の当日走り回って頂いたり、特殊な問題で相談にのって頂いたり、置ききれない物資を預かって頂いたり関わり方もさまざまでした。しかし、まだ、それぞれの力を十分には出し切っていない部分も多いと感じます。相談会はホームレス問題に関心を持っている人たちが集まる場なので、多様な支援者の力や特徴をもっとうまく生かし、互いに連携させることができれば、と思いました。

3. 「炊き出し・総合相談会」報告

昨年10月19日に、初めて札幌市と民間支援団体が共催する形で「炊き出し・総合相談会」が開かれました。

まず、流れは午前中に健康診断、お昼に炊き出し、午後から総合相談の順に進められました。また、労福会のメンバーは見学を含め30名弱の方が参加し、民医連の橘さんをはじめ、関係するドクターも参加くださいました。一方、札幌市側の体制としては終日、保護指導課の職員5名が対応にあたったのに加え、午前の健康診断には結核予防会などから15名程が参加しました。それから午後の総合相談会には、ハローワーク札幌などから3名が出て就労相談をし、区保護課から6名が出て生活・福祉相談をしました。また、札幌弁護士会の人権擁護委員会から3名が出て法律相談が行われました。なお、NPO「ハンド・イン・ハンド」さんの方4名も午後から参加しました。ところで午前中検診を受けた当事者の方が約39名、お昼からの炊き出し時点で122名、午後からの相談を受けた方は延べ40名ほどでした。それから保護同伴を希望する方が20名弱おり、翌週より労福スタッフとハンド・イン・ハンドが対応することになりました。またその結果、大半の方につき生保受給が決定しました。さらに、11月15日に健康診断の結果を受け渡すために行った生活健康相談会では88名の方が来場し、そのうち検診を受けた方25名に診断結果を返却することができました。

この相談会は以下の点で評価できます。すなわち第一に、市が実態に直面する契機になり、多くの機関を巻き込むことができた点。第二に、生保申請につき以前より柔軟な取り扱いを引き出すきっかけになったという点。第三に、行政が、当事者のニーズを把握しようと努め、施策を行えばそれなりの結果をきちんと出すことができることを確認できたという意味で、次の施策への期待が持てた点。また、多くのマスコミによって報道されたため、世間一般へのアピールにもなったと思われ、支援団体間の連携の観点からもプラスになったと思います。事実、この相談会以降、メディアを通じて会を知ったという方のアクセスが増加しました。

札幌市としてはこのような相談会を来年度以降も開催したいという話も聞いています。今回、行政・市民団体の連携はもとより、行政内の各パート間、市民団体間の連携の重要性を痛感しました。しかし最も重要なのは市民全体でこの社会問題を考え、動くことです。当事者にとって真に価値ある選択肢を増やしていくには、やはりもっと多くの人間なり機関なりを巻き込んでいく必要があると思われれます。

2003年度労福会生活健康相談会 および各種相談会 一覧

回	日付	当事者	支援者	内容	健康相談	生保同伴
1	5月18日	123名 98*	43名	炊き出し(おにぎり、豚汁)、物資配布、生活相談、健康相談 ※おにぎり・豚汁が不足する、風邪多い	15名(風邪8名/ 高血圧1名/左足 腫れ1名/目の病 気1名)	7名
2	7月19日	135名 109*	45名	炊き出し(おにぎり、豚汁)、物資配布、生活相談、健康 相談、散髪コーナー ※散髪コーナーが大繁盛	19名	16名
3	10月19日	122名 84*	30名弱	健康診断(結核予防会)、総合相談(ハローワーク札幌、区役 所保護課、札幌弁護士会)、炊き出し(おにぎり、豚汁)、物資 配布 ※札幌市との共催	15~16名	16~17 名
4	11月18日	88名	40名 前後	健康診断の結果配布(39人中25名に配布)、炊き出し (おにぎり、豚汁)、物資配布、健康相談、マッサージ、 衣料品配布、生活保護相談コーナー、区役所・病院同伴調 整 ※衣料品の余りをどうするかが問題化	3名	13名
5	1月24日	80~87 名 74*	39名	炊き出し(おにぎり、雑煮)、物資配布、生活相談、健康相談、 医療品配布、散髪(15~20名)、お楽しみ企画(41名)、生 活保護相談コーナー、区役所・病院同伴調整 ※散髪コーナー・お楽しみ企画が大繁盛	13名(糖尿病、高 血圧、先天的障害 など)	15名

★昨年度同時期の参加者数

4. 生活保護同伴報告

・生活保護申請同伴のまとめ

当会が路上生活者の脱野宿のお手伝いをさせて頂く際に、現段階で取りうる有効な手段として生活保護の申請があります。市民の方々のご協力もあり、今年度生活保護の申請にいった方は同伴した72名のうち52名でした。(昨年度は47名のうち31名)

現状では、保護の申請のためには住所が必要で、その住所をどのように得るかが同伴において一番の問題となってきます。また住所を得て生活保護を受けるまでの過程には大きく分けて三つの流れがあり、一つ目は保証人や前金なしでアパートの契約をしてくださる大家さんの協力を得て直接居住地を得る方法(今年度は16件)、二つ目は救護施設に一旦入所し、そこを住所にして最終的には居宅へと移る方法(同上25件)、三つ目は検診命令をもらい診察を受けて入院をし、病院を住所に治療後居宅へ移る方法(同上11件)です。

しかし、救護施設に空きが無い、診察を受けても緊急入院の必要が無い、また、ベッドに空きが無いということで住所の確保がスムーズに行かない場合が多々あります。住所の他にも生活保護を受けるにあたって様々な制約が存在し、途中で保護を打ち切られてしまうというケースも生じています。また、何度か保護を打ち切られている方が申請に行くと「信用できない」ということで申請が通りにくかったということもありました。

(※次ページ参考)

以上のように同伴の数は昨年と比べてかなり増えたものの、依然として保護申請に至るまでには様々な困難が存在します。

・生活保護申請同伴の課題

第一の課題として今年度も生活保護同伴を行うのが会の一部の人々に集中してしまいました。やはり同伴となると負担が大きくなる上に、今年度は同伴スタッフが少ないと言うこともあり、去年以上に一部集中してしまいました。負担を減らすためにできるだけ男女2人での同伴を行うようにしたり、1人の当事者を数人で取り次ぐように調整をしたりと試行錯誤したのですが、あまり上手くいきませんでした。これに対し、同伴は炊き出しの後に集中しているので、毎回の夜回りの際に同伴希望を募ることで、一時期に集中するのを避けられるのではないかと、という案が最近あがってきています。具体的には何も決まっていますが、これが実現すれば、負担が軽減するはずで

第二に、今年度、生活保護の学習会や、同伴の情報を共有する場を設けられなかった事が反省点としてあげられます。このような話し合いは今まで保護や同伴に興味の無かった人にもある種の刺激になったり、同伴している人も周りからアドバイスをもらったりするなど、精神的な支えが得られる場として有効に働くと思われ

第三に、個人で行った同伴の記録の管理が今年度はおろそかだった事も今後の課題の

ひとつです。同伴に行った人は毎回“記録書”に同伴の内容を書くことになっていたのですが、今年度はその事を徹底する事ができませんでした。同伴を引き継ぐ際に、ある程度の情報がないと大変苦労します。

第四に、居宅生活に移った方のサポートについてです。生活保護を切られて再野宿する人がいることや、居宅に移ることが必ずしも社会復帰には繋がっていない事も事実です。今年度は居宅生活者との繋がりをもっと大切にしていこうという方針でしたが、会全体としての活動は年始に年賀状を郵送した事にとどまり、その難しさを改めて実感させられた年だったと思います。例えば、定期的に居宅訪問をしたり、手紙を書いたり、ケアの方法は幾つもあります。会でできることはどのようなことか、という話し合いの機会を今年度はあまり持つことができませんでした。これはすぐに明確な答えが出るような問題ではありません。考えていかなければならない課題だと思います。

※参考：今年度の札幌市の「ホームレス」に対する生活保護の運用について

現在、札幌市においては「住所不定」状態にある方が生活保護を利用する場合、基本的に本文にあったような三つの経路をたどります。この生活保護のあり方については、大きな問題があるというのが当会の基本認識です。というのは、入院治療が必要なケースはともかく、居所のある申請者と異なり野宿者の場合、施設入所を強いられたり、申請前にアパートの部屋を確保することを求められたりすることにより、申請や受給のハードルがとても高くなっているためです。救護施設では、法定の利用者ではない野宿者(本来、救護施設は単身で生活することが困難な方のための長期利用施設です)は施設内の仮設部屋で寝泊りすることになり、また、施設であるがゆえに外出等の制限を受けるなど、窮屈な滞在を強いられることになります。さらに、お金に余裕のない方(野宿をしている皆さんの大部分)にとって申請前のアパート確保が如何に困難であるかはいうまでもないことです。

野宿者が生活保護を受ける時に、入院、施設入所、事前のアパート確保という条件が必要になってくるのは、札幌市が依然として「住所(居所)の定まらない者には生活保護の適用ができない」というルールに従って生活保護を運用しているためです。つまり、札幌にある三つの経路というのは、何らかの形で居所を定めた上で保護を適用するためのバリエーションであるといえます。生活保護法また厚生労働省の自治体宛通達を読む限り、「居所の有無」は生活保護を受けるための要件とはいえないので、上記のルールは根拠の薄い「慣行」として当会は理解しています。そこで、当会では市に対して、居所のある申請者(通常の方)と変わらない野宿者への生活保護における対応を求めてきましたが、今年も態勢は大きく変わりませんでした。

ただし、今年度は、野宿者が申請前にアパートを確保するにあたり契約時に必要な資金を行政が供与するという前進もみられました。当会が申請に関わった事例においても、既に数件の敷金等の供与が確認されています。この動きは2003年夏に厚生労働省が自

治体宛に出した通達にしたがったものですが、保護指導課との懇談会で確認した限り、敷金供与について市はかなり慎重な姿勢をとっており、すべての希望者に適用するということには至っていません。

・生活保護申請の同伴記録表

番号	同伴時期	結果 1	結果 2	備考
1	5月生活健康相談会	相談	救護入所	
2	〃	検診命令	救護入所	通院
3	〃	検診命令	入院	
4	〃	検診命令		
5	〃	救護入所	居宅保護	
6	〃	救護入所		
7	〃	入院	居宅保護	
8	〃	検診命令	入院	
9	7月生活健康相談会	入院		
10	〃	居宅保護		
11	〃	居宅保護		
12	〃	居宅保護		
13	〃	居宅保護		
14	〃	居宅保護		
15	〃	居宅保護		
16	〃	救護入所	居宅保護	
17	〃	相談		
18	10月総合相談会	救護入所	居宅保護	病気治療中
19	〃	検診命令		
20	〃	入院	居宅保護	
21	〃	入院		
22	〃	救護入所	居宅保護	
23	〃	就職		
24	〃	救護入所	居宅保護	
25	〃	居宅保護		
26	〃	居宅保護		
27	〃	検診命令		

28	〃	入院	居宅保護	
29	〃	居宅保護		
30	〃	居宅保護		
31	10月総合相談会	救護入所	居宅保護	
32	11月生活健康相談会	入院		
33	〃	居宅保護		
34	〃	救護入所	居宅保護	
35	〃	検診命令	救護入所	居宅保護（道生連の協力）
36	〃	救護入所	居宅保護	
37	〃	検査		
38	〃	救護入所	居宅保護	
39	〃	就職		市役所の紹介により
40	〃	救護入所		
41	〃	居宅保護		
42	1月生活健康相談会	救護入所		
43	〃	検診命令		
44	〃	救護入所	居宅保護	
45	〃			傷病の手当
46	〃	入院	居宅保護	
47	〃	検診命令		
48	〃	救護入所		
49	〃	救護入所		
50	〃	救護入所	居宅保護	
51	〃	救護入所	居宅保護	
52	〃	ハローワーク	居宅保護	
53	〃	検診命令	救護入所	居宅保護
54	〃	検診命令		
55	不明	入院		
56	〃	〃		
57	〃	〃		
58	〃	救護入所	居宅保護	
59	〃	〃	〃	
60	〃	〃	〃	

番号	同伴時期	結果1	結果2	備考
61	不明	救護入所	居宅保護	
62	〃	〃	〃	
63	〃	〃	〃	
64	〃	〃	〃	
65	〃	〃	〃	
66	〃	〃	〃	
67	〃	居宅保護		
68	〃	〃		
69	〃	〃		
70	〃	〃		
71	〃			名古屋の工場の寮へ
72	〃	相談		兄のもとへ(苫小牧)

- ・ 豊平川河川敷工事による退去命令について

札幌市は10月に豊平川河川敷の工事をするため路上生活者に退去命令を出しました。その際、2名の方が自主的に退去し、5名の方が生保を受け、1名の方が区役所の紹介によって就労しました。

5. 他団体・機関との連携について

今年度も会員以外の方々に支えられ活動を進めてきました。物資提供やご寄付、また活動に便宜をはかっていただくなど様々なご援助をくださった皆様に感謝したいと思います。どうもありがとうございました。また、今年度は多くの団体や機関との連携なしには語る事ができないくらい、他団体・機関のご協力に支えられ活動してきました。ここでは、今年度の他団体や機関との連携について報告したいと思います。

札幌には現在、組織的に「ホームレス」支援を行っている団体が当会を含め3団体あります。東京、大阪などでは支援団体間の交流・連携が盛んですが、昨年度までの札幌ではそれが無いことが課題でした。今年は、二つの支援団体、NPO「ハンド・イン・ハンド」さん、「みなずき会」さんと、札幌市主催の懇談会(後述)に同席しました。みなずき会さんには、炊き出しの準備の会場を貸していただき(04・1月)。またハンド・イン・ハンドさん主催の「ホームレス」問題のシンポジウム(03.4月)に参加させていただきました。さらに、ハンド・イン・ハンドさんとは区役所への同伴行動のケース分担も行っていきます。今年度は、懸案であった支援団体間の連携が、団体レベルで始まった年であるといえます。当会だけで札幌の野宿問題へ対応することは難しいので、各団体の個性を生かした連携を進め支援を効果的なものにする事は、来年度に続く課題となります。また、03年7月には全国の野宿者支援団体の交流会・『寄せ場交流会』に事務局長を含む2名のスタッフを派遣しました。民間団体による野宿者支援の盛んな本州の実例から学ぶべきことは多く、来年も当会のスタッフが本州へ視察・研修へ行く機会を積極的に作る事が望まれます。

次に、野宿支援団体ではないものの当会の活動に力を貸して下さった諸団体について報告します。

今年も養護老人ホーム・静山荘さんに、炊き出しの際の食事を準備していただきました。生活健康相談会の報告にもあったように、静山荘さんが用意された食事は、参加者にとっても喜ばれております。静山荘さんとの連携では、こちらからの日程の連絡が遅れるなど不手際があったことを労福会サイドの課題として明記しておきます。

北海道民主医療機関連合会(民医連)さんも、古くから当会の活動にご協力いただきましたが、今年度は民医連さんとの関係がさらに密になりました。従来の生活・健康相談会への医療専門家の派遣に加え、同伴行動にもご協力をいただきました。また、旭川や函館における支援活動の立ち上げは、当会の活動のノウハウと民医連さんの組織力によってなされたものです。さらに、炊き出しの際の試みとして好評だった、散髪・マッサージコーナーに専門家を紹介して下さったのも民医連さんです。適切な医療は野宿者にとって最も必要なニーズの一つです。来年度も引き続き、民医連さんとの連携が継続することを期待しています。

また、今年度から在札の弁護士グループ・人権擁護委員会さんとの協力も始まっています。人権擁護委員会さんとは、6月に懇談会をもち、10月の総合相談会では法律相談を担当していただき、12月には学習会のご案内(当会スタッフが10名程度参加)をいただいております。また、組織的な形には至っておりませんが、当会が対応している野宿者の抱える法律的な問題について人権擁護委員会さんに関わる弁護士の方に、相談に乗っていただいたケースもありました。多重債務や生活保護に関わる行政の不法な対応、等に苦しむ方

が少なくない野宿者にとって法律家のアドバイスや援助は、とても貴重なものです。来年度も、弁護士さんほか法律の専門家の方々との連携がさらに深まることを期待しています。

最後に、今年度の札幌市ほかの行政機関との関係です。昨年来、市の野宿者対策への姿勢が積極的になったこともあって、これまで以上に関係は深まりました。行政機関との共催、委託で行われた活動は、①街頭総合相談会(03.10月)、②10月相談会の健診結果通知会(一回目：03.11月、二回目：04.1月)、③野宿者概数調査(03.12月)です。

10月の街頭総合相談会は、他の箇所での報告にもあったように、行政が重い腰をあげて野宿者の多様なニーズに「総合的に」対応しようと、役所のデスクや窓口を離れて外にやってきたという意味で、野宿者支援に行政がその責任を果たす大きな一歩となったと評価できます。当会としては、行政がこのような姿勢を引き続き発展させていくことを切に願っています。ただし、今年も、生活保護申請を希望する方が各区役所の保護課の窓口で理不尽な対応を受けることは少なくなく、区役所の窓口レベルでの野宿者への対応の改善は、引き続き当会が行政に要求すべき課題として残っています。

こうした行政への期待や要求は、2003年7月以来2回、市・保護指導課が在札の支援団体を集め開催した懇談会の席上で、また総合相談会の準備に関わる打ち合わせの際に、頻繁に行政へ伝えてきました。少なくとも総合相談会の実施内容には、当会の意見をかなりの程度反映させることができました。来る2004年3月25日にも来年度に向けての懇談会が予定されております。しかし、行政への要求に関わっていえば、今年度は市長宛の要望書の提出(2000年冬に実施)のような形での公式な要求を行わず、非公式な場で市保護指導課へ意見を提出したことにとどまりました。

これまでの活動のなかでは、すでに生活保護同伴(10~14ページ)で報告したとおり、野宿者の「自立」支援に関わる課題が多く見えてきました。支援団体としては、目の前の当事者とともに、こうした問題に向き合う必要があることはもちろんです。しかし、これらは当事者個人や支援団体のみが抱え込む問題ではなく、行政も対応すべき問題であることはいまでもありません。行政に問題の本質を知らしめ、具体策を提起していくことを通じて、問題を社会化することは支援団体の責任でもあります。今年度は、行政との関係においてこの点が弱かったことが反省点の一つですが、来年度は、活動の中で蓄積してきたことを、何らかの形で行政に、より効果的に伝えることが課題となると思います。さしあたっての課題としては、当会の意見や要望を公式に行政へ伝えるということ、また、札幌市のみならず国や道にも積極的に働きかけていくこと、の二点があげられます。

6. 2003年度会計報告

・前回からの繰り越し	1,099,809-	
・次回への繰り越し	1,264,534-	
・収入		
会費	201,000-	
カンパ	216,624-	
歳末助け合い運動	200,000-	
札幌市より助成金	200,000-	
人数確認調査	680,498-	
利息	14-	前年度比
小計	1,498,136-	(+422,093)
・支出		
生活健康相談会	709,880-	
生保申請同伴	243,916-	
夜回り	90,659-	
人数確認調査	105,800-	
通信	74,093-	
広報	46,957-	
事務用品	12,402-	
総会	11,004-	
その他	38,700-	前年度比
小計	1,333,411-	(+387,908)

注・2003年1月に実施した人数確認調査に関する収支も含まれております。

2003年度会員 賛助3件 一般16名 学生16名

以上、2003年度会計の報告を致します。

2003年3月1日

代表 椎名恒
 事務局長 安部薫道
 会計 寺嶋祐一

・今年度も本会の活動に協力し、寄付金や衣類等を提供して下さった皆様に心からお礼を申し上げます。皆様方からの寄付は路上で生活する方の支援に使わせていただいております。来年度もご理解、ご協力を宜しくお願いいたします。尚、寄付に関する質問、意見などがございましたら事務局までご連絡ください。皆様の声を伺うことでよりよい会にしていきたいと思っております。

○今年度のまとめと来年度の方針

収入について

- ・ 労福会は02年冬に国から、03年冬に札幌市から「ホームレス概数調査」の依頼を受けた。前頁の「人数調査」の収入はこれによるものである。また、前頁の「人数調査」の収入には、本来ならば前年度の会計報告で処理すべき02年冬の調査での入金額（¥480,998-）を含んでいる。このため、今年度の実質収入額はおよそ100万円であり、今年度は30万円以上の赤字を出してしまった。
- ・ 来年度も「歳末助け合い運動」から寄付金をいただけるかどうかは不明。
- ・ 以上のように収入が不安定であるため、各種助成金に積極的に応募するほか、皆様からのご協力をえるための努力がよりいっそう必要となる。

支出について

- ・ 昨年度までと同様に支出において「生活健康相談会」の占める割合が高い。これからは「生活健康相談会」で配布する物資を工夫する必要がある。

7、今年度の課題と来年度の活動

札幌における路上生活者問題の情勢は、ここ数年の人数調査の結果からも（参照：資料①）、また行政の施策・保護運用の不十分さが露呈しているということからも（参照：生活保護同伴報告、他団体・機関との連携）依然として極めて深刻であるといえます。今年度50名を越す当事者が保護申請後、脱路上を果たしたにもかかわらず、人数調査をすれば毎回100人近くが確認されるということを考えると、「いっこうに減らない」という現実があるといえます。

さて、発足5年を迎え、会は成長し活動は拡大してきました。行政との合同人数確認調査、炊き出し・総合相談会の共催、それから事務局への当事者からのアクセスはもとより、一般市民からのアクセスも増えたことに鑑みると、社会的に、会の役割に対する期待が大きくなってきているともいえます。このこと自体は当事者にとっては利益そのものであるといえますが、しかし実はその反面、会のキャパシティがそういった事情についていけなくなってきたという事態が深刻化しています。端的にいうとスタッフ・資金が不足してきているのです。最大限に当事者のニーズに応えるためには、私たちはこういった内在的な問題をクリアせねばなりません。とはいうものの「強い組織作り」は今日明日どうにかなるような簡単な問題ではないというのもまた事実です。中・長期的課題として打開策を打ち出していきたいと思います。

ただ、力量の範囲内で当事者の期待を裏切らない活動を持続していくために、来年度以降、活動内容の再検討・整理・代替案の模索は随時行っていきます。活動が悪い意味で固定化しないために、常に当事者のためになることは何か、それを能力の範囲内で効果的にやるためにどうするか、優先順位はどうか、などについて議論を行い、それに基づいて活動していきます。具体的には定期的な役員会議を設けて事務局会議の効率化を図ろうと思います。また、同伴ケースの共有・引継ぎの場を設けて少ないスタッフでもやっていける体制を作ろうと思います。

スタッフ・資金に関しては、会が「ボランティア団体」である以上難しい問題であるといわざるを得ません。しかし、来年度はそれらを獲得する努力は当然として、立ち止まって自らの活動を再検討して、事情に見合った柔軟な姿勢に切り替える勇気をもって取り組みたいと思います。

最後になりましたが、私たち今年度の役員は会の規約の通りその役目を今日終えます。一年間会を動かしてきて思うこと、それは問題がそう簡単には解決できない非常に困難なものであること。それからそれに取り組む会がなんと脆弱であるかということです。しかしたとえ非力であっても、私たちは当事者という市民が餓死したり凍死したりするのを黙って見ている市民でありたくないのです。活動を必要とする人がいる限り、私たちは市民団体として存在し続けます。来年度の役員に、活動の「灯を消さない」ことを期待します。

8. 私と労福会

南部 葵（北海道大学大学院教育学研究科修士課程1年）

毎年、この「私と労福会」を書く時が、ぼくにとって1年の活動を振り返る貴重な時間となっている。今年で3年目になる。今回は、自分自身に素直になって、自問自答してみようと思う。

— 労福会が支援活動を続け、それなりの結果を出していくにつれ、会の仕事は年々増え続けているようだけど、おまえは今年、院生というのを理由に少々仕事の手を抜いてはいなかったか。

「いえいえ、そんなことはありません。もちろん、もうぼくも引退組ですから、中心的な仕事からは身を引かなければいけません。ただ今年は、役所や病院の同伴という仕事を引き受けることが多かっただけです」

— 同伴というのはやはり必要なのだろうか。

「野宿生活から抜け出したいと考える人たちが、どうしたら脱路上ができるか、個々のケースにそって一緒に考えていくことが、同伴の意味だと考えています。誰でもこうすれば抜け出すことができるというルートが決まっていれば、その知識を提供するだけでいいかもしれませんが、現状はケース by ケースなので、労福会が自立を支援するという目的で活動している以上、これ、はずせないものだと思いますね」

— でも同伴をするのはたいへんなことではないのか。

「正直、しんどいことだってありましたよ。具合の悪いおじさんを生活保護につなげようと同伴していて、役所からも病院からも断られたときには、どうしようかと思えますよ。本人も相当ショックでしたし。それから、必要以上に頼られるときとか……。はじめの頃、同伴をあまり引き受けたくないという気持ちはありました。とにかく不安でいっぱいでしたので。ただ、役所で必要書類にどう記入していいのかわからないおじさんや役所や病院でどうしていいのかわからなくなるおじさんもいますから。最近では、同伴はそういうときのつなぎ役かなと、それくらいの心境で。だから、そんなに肩に力を入れなくても、うまく距離をとってやっていれば、さまざまな社会の矛盾に戸惑いながらも、たくさんの経験をさせてもらい、学ぶこともほんと多いです」

— 同伴をするのは単におじさんのためにだけでなく、自分のためにもなっているわけか。

「何か行動するとき、他人のためだけにやるということはきついものがあります。自分の関心や問題意識と結びつかないと難しいかもしれません。人は困ったときにその人の力だけでは、どうすることもできないことがあって、サポートを必要とするときがあります。話を聞くだけでもいいし、何でもいいと思うんだけど。ただ、そういうサポートをしてい

るときに、自分のためにやっていると思っている人はほとんどいないと思う。だけど、そのときの経験が後になって、『何かに役立つかな?』くらいはときどき思いますね。活動を通じて、ぼくは今まで見過ごしていた事柄に『気づく』ことがあります。そんな『気づき』の経験は大事にしています。だから、無意識のうちに、自分のためになっているのかもしれませんが」

— やっぱり、今年も「労福会」をやっていてよかったのか。

「こういう活動は、いろいろな立場の人たちから批判されたりして、理解されないことが多いです。やっていて、必ずしも楽なものではないしね。ただ、答えはないと思うんだけど、どうすべきかみたいところで、議論をし、悩み、活動することで、今年もいろいろなことを考えさせられました。そういう意味では、よかったのかな。最近、ボランティア論の研究のなかで『動員』という現象が指摘されていますが、参加している個々の人が『なぜ自分が関わるのか』という目的意識みたいなのをきちんと持つ（常に自分に問いかける）ことが大切かも。そうすると自分の居場所や関わり方もみえてくるしね。そんなことを最近思ったりしています」

— 結局、おまえは自分中心に関わっているわけだな。

ううっ……。絶句

「あなたのそばに助けを必要としている人がいる」

浅井 繁（旭川市 どんぐりの会）

マザーテレサは、皆さんもご存知の様に、インドのカルカッタで、誰から見守られることもなく亡くなっていく人たちを路上から収容し、せめて死ぬときぐらいは人間らしくと、『死を待つ人の家』を創設された方です。

そのテレサが、世界各地からカルカッタに集まってくるボランティアに向かって仰った表題の言葉を私が目にしたのは2001年の秋の事でした。

現在『どんぐりの会』のまとめ役をしている妻の博子が、ヘルパー稼業の傍ら旭川の街中で、所謂『ホームレス』のおじさん達に声を掛け、今日はパンをもらってもらえた、だめだった、などと一喜一憂する事となったのは2002年の春頃からだったと思います。

札幌の『労福会』が旭橋の下流で9月に炊き出しを行うという話が真鍋さんからもたらされ、その場に参加した私達の、グループとしての活動が10月中旬から始まりました。10月末に、博子が『先生』と呼ばれる人から、「医者に診せたい仲間がいる」と声を掛けられ、その彼が病院へ行き、生活保護を受給する事となったのはその2日後でした。

『先生』は、今でも私達のバックに何か大きな存在があると疑いを持っているようです。

実際には、市の係の方が旭川駅でホームレスへの聞き取り調査を行うというその日に、たまたま飛び込んだだけの事で、私達にしてみれば、勝手に道が開けていったに過ぎません。9月からこっち、生活保護を受給する事となったホームレスは15人を超えたようです。

現在、私達は外回り7名、支えてくれる人が数名で、第二土曜日におじさん達のたまり場を回り、第四土曜日に市が無料で貸してくれる施設で炊き出しを行っています。

この炊き出しでは、市の係の方もボランティアで生活相談を引き受けてくれています。

課題は、生活保護に入ったおじさん達が、孤独に陥ることなく自立していけることを支援する事で、改めて仲間を募らなければいけない段階にさしかかっています。

橋 晃弘（北海道民医連）

一昨年春（ごろ？）、初めて炊き出しに顔をだしました。相当「恐る恐る」に。なぜか。一つには路上生活者に初めて接する「恐れ」。これは、みなさんも初体験の時はずいぶんあったでしょうが、会場に入ってすぐに解消されました。「なんか普通のおじさんだね」（この場合、自分が「おじさん」の一員であるとは夢にも思っていない）。もう一つの「恐れ」は、「こんなボランティアをずっとしている学生とは何者？」ということでした。自分たちで企画立案して実行までしてしまう。そのうえ区役所の職員まで相手にしてしまうなんて、自分の学生時代には考えられませんね。そんなことができる学生は「普通ではないに違いない。相当の頭でっかちか、変人のたぐいではないだろうか」とかなり「恐れ」ました。2年近くがたって、やっと慣れてきたかな、と思います。

「あたりまえのくらしにいかに近づけられるか」もし「おまえが労福会にかかわっているポリシーはなんだ」と聞かれたら、こんなふうに答えます（聞かれたことはありませんが）。よくいわれる憲法第25条の「最低限度の生活」っていうのは、「がまんできる最低限」ということではなくて、「普通の生活＝あたりまえのくらし」のことだと思っています。だから、「あたりまえ」のことができなくなった人に行政は行政なりに、市民は市民なりにできることをお互いにやろうよ、と。（生活保護を受けたい、という人を区役所に連れて行くのは市民にできることであり、その人の話を聞いて保護の申請を受け付けるのが行政の仕事なのだよ。〇〇区役所の方）

「夜ちゃんと寝れないと肩・腰がつかいだろうなあ」と思うから、マッサージをお願いするし、「髪を切りにいくなんで機会はなだろうなあ」と思うから、床屋さんにもきてもらうわけで、それは普段私たちがあたりまえにしていることを路上生活のおじさん・おばさんたちもしてもらって当たり前だと思うからです。

まあそれでも、（冷静に考えると）みなさんの倍もこの世に生きているのに、労福会にいるときは「同世代」のつもりでいる（！）。いろいろ言っても、これが「わたしと労福会」の究極の答えだったりするのですよね。

小野寺 ひとみ (札幌医科大学 保健医療学部 看護学科 3年)

私が労福会に関わり始めたのは、1年半前の秋だった。元々、国際協力の興味が有り、ベトナムやフィリピンで行われているスタディーツアーやワークキャンプに何度か参加していた。その中で、路上で生活する人々（特に子供達）に出会い、また彼らを支援する国の施設や海外のNGOがたくさんあることを知った。そして、自分も人を支援する何かをしたいと刺激を受けた。よく考えてみると、札幌にも路上生活者はいる。今まで、ただ通り過ぎるだけ、時には嫌悪感さえ持っていた（ごめんなさい・・・）人達ではあったが、自分の身近にいる路上生活者の生活や想い、求めるものを知りたい、そして自分にも何かができるかと考えて、労福会の活動に参加させてもらうことになった。今年度は学校が忙しく、結局1度しか生活健康相談会に参加できなかったが、前年度も合わせると、今まで5回ほど生活健康相談会で、健康相談前の血圧測定や、待っている間に路上生活者の方にお話を聞かせてもらい、事務局会議や朝のピラマキに参加した。

札幌の路上生活者との関わりの中で、彼らはとても普通の人であること、外国で多く見られるように、アルコールや麻薬中毒で路上生活になるのではなく、この不景気のために職をなくし、家族と折が合わないために、路上生活を余儀なくされた人達が多いことを知った。路上生活を少しでも苦痛なく過ごすための生活の工夫、自分の健康への不安を持ち、人と話すことや、少しでも良い生活を求めているという普通の人と変わらない路上生活者と接することで、今まで持っていた偏見がなくなり、海外など遠くばかりではなく、自分の近くで路上生活を送る人の現実を目を向けられるようになったことは、私にとって大きな学びであったと思う。

私が見てきたこの1年半で、この会に関わる人達はとても多様になってきたと感じる。公的扶助に詳しい社会福祉系の先生や学生、医師、看護師、医療系の学生、教会関係の方々、中学生、高校生、その他市民の方など、様々なバックグラウンドを持つ人が関わっている。お互いの専門性や得意分野を生かして、路上生活者を身体的、精神的、社会的、霊的と色々な角度から捉え、関わることで、路上生活者に必要な援助ができることが理想だと思う。私も看護学生、将来は看護師として、身体、健康の側面から路上生活者に関わっていきたいと思う。

「ホームレス」のこころの居場所

坪田 裕佳 (北海道大学大学院教育学研究科修士課程 1年)

私が本会の活動に参加し、いわゆる「ホームレス」と呼ばれる方々と関わりを持つようになってから4年が経った。今は本業の研究が忙しく、なかなか会の活動に参加できずにいるので、会の活動そのものに対する意見や感想はここではあまり書くことができない。しかし、つねに「ホームレス」のおじさんたちの姿は街を歩いていても目に入るし、昔馴染

染みのおじさんたちと偶然会った時に話をするなかで、自分なりに「ホームレス」問題について考えてきたつもりなので、つたない文章ではあるが少し書いてみたいと思う。

「ホームレス」とは、文字どおり「ホーム（家）がない」人々である。彼らは住む場所を失った人々なのであるが、「ハウスレス」ではなく「ホームレス」なのである。これは意味深い言葉だと思う。「house」は一般に「家屋・建物」のことをさすのに対して、「home」は「家庭・安息の場所」という意味をもつ。彼らの多くは、何らかの理由で家族と連絡を取ることができず、縁故を頼ることができない状態にあるのであり、まさに「安息の場所」を失っている状態なのである。人間にとって家庭や家族・血縁関係というのは、社会で生きていくうえでの大きなこころの支えとなるものである。家族がお互いを愛し、必要とし、支え合いながら生きていくことが、人間の生にとって必要不可欠なのである。彼らはこの「安息の場所」を失ったとき、どれほどの孤独感を覚えただろう。住む家を失い、助けてくれる人も頼れる人もない。その絶望感と喪失感は、言葉では言い表せないであろう。親に甘えてぬくぬくと暮らしている私には、とうてい想像できない。

本会の自立支援活動で生活保護につながり、居宅生活ができるようになったおじさんたちのなかに、せっかく手に入れた住居を出てふたたび自ら「ホームレス」となってしまう人が少なからずいる。このことは、彼らが「ホームレス」仲間と、ぎりぎりのところで支え合いながら路上で生活してきたなかで、その仲間がこころの支えとなり、仲間と生活した路上が「安息の場所」となっていたのだということを示しているのではないだろうか。われわれの自立支援活動は、「ホームレスを居宅へ」だけでは終わらない。彼らがその居宅生活を、他者との豊かなつながりのなかで自律的に営んでいくことができるような支援が望まれる。

上述のことは会議のなかで何度も議論されてきたことであるが、本会の運営事情などもあり、なかなかアフターケアの充実にまで手がまわらない状態である。しかしこのことは今後の活動を考えるなかで、つねに積極的に考えるべき議題の一つであると思う。

中明 結花（北海道大学医学部6年）

原稿依頼をもらった時、またこの原稿を書く時期がきたんだなあと感じました。そして、さて、何を書こうかと考えたのですが、特に強く主張したいこともありません。ただ、このところ私の中で生じかけているちょっとした疑問がひとつあるので、そのことについて書いてみたいと思います。

この前の12月に私は初めてひとりのおじさんの生活保護同伴を担当し、つなげることができました。ひとまずおじさんの新しい生活が始まって間もない頃は、正直なところ何と

も言えない充足感がありました。もちろん現在もこの感情に変わりはありません。

ただ、思うのです。保護費を持ち逃げしたとか、家賃を滞納してアパートを追い出されその結果生保を打ち切られた、などという話をML上などで知った時、もしも、自分が今のような学生という立場ではなく、社会人になって税金を払っていたとしたら、どう感じるだろうかと。心のどこかで、もっとある程度その人となりを見てから同伴すべきなのではないかと思う気がするのです。

もちろん、みんながみんな金銭的にだらしのないわけではないので、労福会の同伴活動を批判しているのではないのです。ただ、生活保護費の源は、この不景気の中労働者ががんばって稼いだ対価からのものなのだという事を、私自身強く意識したことはなく、そのことを反省しているということが言いたかったのです。

ちょっぴりネガティブなことを書きましたが、私はそれでも労福会の活動はいつまでも続いて行って欲しいと思っています。外で寝ないとならない状況に陥っている人に対して誰も何もしない社会なんて淋しいなと思うのです。

とはいえ、この活動は義務感でやるには少々気が重い種類の事です。4月からも学生メンバーが多くならなかったとしても、決して一部の人間だけが背負うことなく「出来ることを楽しみながら」続いて行って欲しいと思います。

私はこの3月で卒業するので、今後は活動に直接関わることはないと思います。やや年長の割には大した働きもせずに終わりますが、私自身はたくさんのことを考えさせられました。机上の勉強だけではおそらく知ること、考えることのなかったであろうことについて思いを寄せることができました。どうもありがとうございました。

最後にひとつお願いがありますが、もし私が勤医協の医師として企画に参加することがあったとしても、絶対に「先生」と呼ばないでくださいね。

中川雅紀子

ともすれば私たちは、この学歴偏重主義の日本において、ひとより有利な人生を獲得するためにと幼児の時から隣の子供と競うことを訓練され級友より1点でも多く試験で得点することを良しとされ思春期の頃までにはすっかり“他人を蹴落としてなんぼ”の感覚へと見事に育て上げられる。関係ない他人に関わってる暇など微塵もない勢いである。

私が一昨年、これはひどいと感じたその光景は、出来の悪い絵本のようなだった。その駅にあるガラス張りのスタンドカフェには、冬の寒さを逃れつかの間温まる人たちが湯気をくゆらせ暖かい飲み物を口に運びガラス越しに遠くを眺めていた。しかしガラスの外側の

すぐ足元には路上生活者のひとびとが真冬の厳寒の中で凍えながら身を横たえていた。さらにその付近を駅利用者の一般通行人がそこには何もないかのように、つまり「自分には関係がないので」という当然の態度で、多分目の前で路上生活者のひとびとが死んでいようが血を吐いていようがずぶ濡れで雷雨に見舞われていようがやはり「自分には関係がないので」という態度で真横を通り過ぎさっさと帰途へ向かっていた。あなたがたは今彼らの傍らを通ったその同じ足でぬくぬくと最寄の百貨店に入りグルメ惣菜を平気な気持ちで買って帰れるのか??と聞いてみたかった。が、聞くまでもない。全員答えは Yes なのである。でなければ私がしばし眺めていた間に少なくとも一人くらい彼らに声をかけたり差し入れをしたっていいはずなのだから。つまり、ひとはたとえ1円だってそのへんにばらまいたりほしくないということだ。例えば私達は自販機のつり銭が10円足りないだけでも腹が立つし、ましてや100円あったら飲物や新聞が買えることも知っている。実際はその100円がなくなっただけでどうってことはないはずなのに、いざその100円を何の対価もなく手放すことにはさして大いに抵抗を感じるのだ。だからスロットで万札をスルのはOKでも、しのびない生活を送ってる人に千円札1枚だけでもさしのべることすらNOなのである。自分さえよければよい(=他人はどうでもよい)という教育の原型がもたらす産物がここにある。

弱者はどこにいるか。せめて国を司る職にあるひとびとには机を離れて体験してもらいたい。同じく毛布をかぶって同じく冬の夜を野外で過ごし問題は果たして何なのか自問してそれから福祉にあたるべきではないか?公務とは本来そういうものであるべきではないのか?本当に「国」=「わたしたちの暮らし」をよりよくしたいと国の仕事に就いたひとならば自ずとたどり着く結論であるはず。が、「自分」=「私事」のためだけに公務を選んだひとびとは公務そのものではなく公務の処遇のほうが目当てなのだから、結局仕事自体も「自分だけがよければいい」(敢えて困難なことには取り組まない)のだろう。大体、官庁に年間億単位で裏金をこしらえられる才覚があるのなら、なんだって路上生活者支援施設のひとつやふたつ簡単に出来ないのか。裏金の余りででも充分お釣りがくるだろうに。昨今のテレビ報道を見て苛立たしく思った。そして解かった。出来ないんじゃなく、やらないだけなのだ。「見返り」がないからだ。路上生活者を保護したところで実質役人にはなんの「対価」もない。じつに腐った世の中なのだ。

松林 恵介(北海道大学医学部4年)

僕がこの労福会にはじめて参加したのはたしか大学2年の5月ごろで、もう3年間近くも活動していることになる。こういうふうを書くともるでものすごく熱心に活動しているように感じるかもしれないがそんなことはなく、健康相談会の時にしか参加してなかったりする。でも続けることに意味があるのではないかということで、細くても長く続けている。ほんとうに幹部の皆さんごくろうさまです。

3年近くもこの会に参加していたのに「私と労福会」というものを書いてこなかったか

らなにを書いていいかわからないので、僕がこの会に参加しようと思ったきっかけでも書くことにする。

以前から僕は国境なき医師団に興味をもっていて、ふとしたことから国境なき医師団日本に参加する条件などをメールで聞いてみたところ、医師免許、臨床経験、語学、協調性、柔軟さ、などが最低限の条件だというような返事がきた。そして最後に、

「さらに、日本国内においても援助を必要としている人々はたくさんいます。例えば、失業などにより野宿をしいられている人々は最低限の生活どころか、生きるのがギリギリの生活をしています。昼間から寝ている怠け者ではなく、一晩中駆け回って生きていくための仕事をしている人々が殆どです。一度野宿という状態に陥ると、そこから自立していくのは想像以上に困難で、様々な権利も受けにくくなってしまいます。厳しい生活環境のなかで、健康を害し路上で亡くなっている人は何百人もいます。国境なき医師団日本もそのような人々にどのようなことができるかと現在支援を始めているところです。実際に海外だけではなく自国の問題に目を向けて、世界の様々な問題と同じ視点で考えていくことも大切なのではないかと思います。」

と書いてあった。最後の「実際に海外だけではなく自国の問題に目を向けて、世界の様々な問題と同じ視点で考えていくことも大切」というところを読んで「なるほどね」と思ったので、何かしようと思ったが、一人で何かできるはずもなく、なにをしていいかも思いつかなかった。ということでメールに書いてあるとおりホームレス支援のボランティアをしようとして北大のボランティアセンターにいったことが労福会に参加するまでのなりゆきである。

その後、この会に参加して自分が得たものはたくさんあり今でも多いが、それらについて書くのはまたの機会に。

近藤 修平（北海道大学大学院教育学研究科修士課程1年）

私が労福会の一員となって、もう4年が経った。もっとも今年度は私的な理由で炊き出しにもあまり顔をだせていないので、労福会の一員だ、と胸をはって言える立場にはないのだが…。私がこの会と関わり始めた当初のことを、少し顧みてみようと思う。

およそ4年前、私は北海道での初めての越冬を経験していた。雪が降ることなど殆どない地域に生まれた私にとって、札幌の冬は、まさに厳しいものだった。あまり外にも出ず、部屋のこたつに籠もってばかりいた。そんなとき、この会に今だに所属している南部さんから、労福会のことを聞き、炊き出しを手伝わせてもらった（もっとも、この当時はまだ会の名称もなかった）。会としての炊き出しも初めてのものだったので、今に比べれば拙いものだったのだろう。しかし、皆、一生懸命だった。なにしろ、先駆者がいないのだ。「どうすれば、もっといい企画になるか」という話をよくしていたように記憶している。

その頃の炊き出しは、今は公園になっている、札幌駅高架下のエルムの里公園で行っていた。高架の近くにお祭りの出店で使うテントを張り、その中で食べ物を準備していた。企画を通して路上生活者の方の暮らしを見て、私は本当に驚いた。「こんなところで暮らしてたら死んでしまう」というのが最初頭に浮かんだ感想だったと思う。そして、企画を重ね、彼らと話していくうちに、本当に様々な理由で、彼らが路上にいることがわかってきた。そして、彼らが絶えず自責の念を持ちながら暮らしていることも窺えた。

私は、いつのまにか、「彼らのために、自分にできることはやろう」と考えていた。ボランティア論を論じる知人や集団の在り方について論じる知人もいたが、私にとってそれらは意味を成さなかった。何よりもまず、目の前の現実に関わりたかった。彼らの空腹や寒さ、つらさが少しでも和らげれば、と思い、企画のときには路上生活者の方一人一人とじっくり話をした。人が人と関係を創るとき、じゅうぶんな会話なしではできないからだ。

この考え方は、当会の活動を通して、私が得たものの一つだと思う。今の私が、この会の活動から多大な影響を受けているのは間違いないだろう。今年度は当会にあまり関わっていないが、できるかぎり、この会と繋がっていたいと思う。そして、いろんな人と話していきたい。

椎名結実（北海道大学法学部3年）

今年はどちらかという会の参加者というよりも、参加者に呼びかける側にいたと思う。ただ手伝っているだけではなく、どうしていいか、といつも考える側になると、「労福会ってほんとにいいことをやっているのかな」とか「どうして人が集まらないんだろう」とか「みんなほんとにはやる気がないんじゃないか」とか、色んな不安や不満を抱えつつこの会ってあるんだなと思うようになった。しかし私は（そんなに大変じゃなかったせいかもしれないけれど）、労福会はあった方がいいと思う。なぜなら、第一にホームレスのおじさんを見ても何もしないで素通りすると私自身にフラストレーションがたまるためであり、第二に、おじさん・役所からニーズがあると感じるからだ。

今年、私が同伴して強く印象に残っているおじさんがいる。Mさんである。彼は糖尿病を抱えた中で路上生活をし、市との共催で行った健康診断で異常を告げられた。病院へ行く約束をしていた日の早朝、彼は救急車で病院に運ばれ、寝ぼけ眼の私の元へ病院から電話が来た。

「なんだよ、朝六時だよ…。行こうかな、行くのよそうかな…」果たして、行ったところで何になるだろう？しかも、眠い。だが何ということだろうか、彼の運び込まれた病院は、うちから自転車で15分ほどの近距離。「ああ…行きます…」何はともあれ、もう目が覚めてしまったことだし行けるのなら行こう。ひとりぼっちで寂しくて私に電話してきたのなら無視するのも申し訳ない。そんな消極的な気持ちで病院へ行った。

行ってみて驚いた。前の日に会ったときは明るく、陽気だったMさんが、額に汗の粒を

浮かべながら救急用ベッドの上で苦痛に身をよじっていたのだ。「ええー!？」だから、昨日病院に行こうって言ったのに————。のど元まで出た言葉を押し込めて、さらに、「ええー!？」な出来事が。ひとりぼっちかと思いきやMさんには、路上仲間のお兄さん一人と、酔っぱらいのおじさん一人が付き添ってきたのだ。しかもMさんには時々看護婦さんが見回りに来るのみで外来が始まる9時まで受診もされないという。

…ひまだった。酔っぱらいを笑顔でかわし、付き添いのお兄さんとくだらない話をしながら、時々安部くんに愚痴メールを送りながら、約二時間半を過ごした。そして、Mさんは担当医から冷たく「入院の必要はありません。点滴が終わったら帰ってください」と告げられたのだった。そのときの私の精神状態といえば、もうストレスがたまっていたまっぴきと誰かにぶつきたくて仕方がなかったのだろう。いささか不純な動機も混じりながら、私は担当医に（できるだけ柔らかく）くっつかかった。最初キレ気味だった担当医も、私に言いたいことを言ったせいだろうか。だんだん落ち着いてきて、結果30分ほど待たせたあげく、Mさんの入院を許可してくれた。この間、酔っぱらいが暴れて叫んで警察を呼ばれたりなんざありあつたけれども、とりあえずよかったと言えるだろう。なんだか疲れてしまって、病院を出たときにほっと涙をふいていたら、通りがかったおばちゃんが親身に慰めてくれてちょっと嬉しかった。まさに捨てる神あれば拾う神あり。

その後Mさんがどうしたかといえば、病院といざこざが生じて追い出され、緊急にアパートを探さなくてはならなくなったり、アパート暮らしが落ち着いたかと思ったら、友達に携帯を貸したために巨額の電話代を請求されたり、と、いつになったら私の電話は鳴りやむんだらうと首をかしげてしまう。

それでも、年賀状をくれたり、企画のたびに顔を見せに来てくれるなど、苦勞した分忘れられない人になった。だから私はまたMさんから電話が来ても、苦笑しながら電話に出るだろう。そして、労福会に入ってよかったなって思うのである。

塙朋子(北海道大学教育学部4年)

労福会の支援者のみなさんへ

大学二年生の夏ごろ、聞き取り調査の手伝いをしてからこれまで、炊き出しや夜回り、会議などにちょこちょこ参加させてもらっています。労福会では、学生を含め市民の方々や医療や福祉、教育に携わる仕事をしているの方々など、たくさんの方が札幌のホームレスの人々に関心をもって、その一人一人とまた福祉制度や行政と向き合って活動を続けています。その中でも、私は、何人かの路上で生活していた方と、生活保護申請相談の同伴をしたり、家探しを手伝ったり、生活保護受給開始後お宅を訪問したりまた時々電話をいただいたりというような「つきあい」を持つことができました。特にそういった中で、自分は手伝いをしているつもりでしたが、友達でも家族でもなくでも本人のために支援するという事など、実はたくさん学ばせてもらったのだなぁと思いました。事務所もなく、参

加している人も多様だし、ホームレスの人々も町の中で点々と存在しているのですが、そのようなそれぞれをつなぐような魅力ある労福会であってほしいと思います。

諏訪 絢子（北海道大学法学部4年）

今年は、炊き出しにちらほら顔を出した程度で、活動自体にはあまり参加しませんでした。そして今、一年間の沈黙を破ってこの原稿を書いています（笑）。労福会の路上生活者支援に対して、あえて距離を置いていました。というのは、昨年度中心的に会に関わり、当事者と支援者の間にある壁（共感できないとか）にどう向き合えばいいのか混乱状態にあり、自分の中で少し整理したいという思いがあったからです。

考えてみてわかったことは、困っているように見える人に対して「共感」することは何も生み出さないということです。私の場合だけかもしれませんが、窮地に陥っている相手に対して「助けてあげたい」という真摯な思いは、自分の許容量を超えた瞬間に義憤に変わり、相手を責めるようになる傾向がある気がします。ある友人が、「相手を理解したと思っても、それは99.9999…%誤解であって、限りなくゼロに近い何%かで一致があったとしてもそれは偶然にすぎないのでは」といっていましたが、これが極端過ぎる意見だとしても、それくらい他者理解は難しいという意味で当たっているかな、と思います。

こうした、人と人との間にある壁をどう乗り越えていくのか。私としては、「共感」すること自体は、それがその人の優しさだったり、才能だったりするので、いいことだと思うのですが、共感する側が自分の許容範囲をはっきりわかっていて、相手がそれを超えている場合は、その事実を受け入れるということが最重要（！）と思っています。

労福会も、おそらく大分前から「どこまで支援するのか」を熱烈に話し合ってきたと思います。学生が、生まれも育ちも違い「人間であること」のみによって、当事者を支援していくのなら、今後（永遠の）課題としては、会のキャパをよくわかった上で、できないことに対しては「できない」と言っていく勇気・謙遜・ポジティブさ etc がますます要求されるのかな、と思っています。まあ、これはメンバー一人一人の課題だと思いますけど。来年こそは、走るだけでなく立ち止まることもできる会になってほしいです。

とにかくにも、今年一年本当にお疲れ様でした。

高柳 晴香（北海道大学教育学部1年）

私が路上生活者の姿を始めてみたのは大学受験のために札幌に来たときでした。その人は駅の隅のほうで小さくなって座っていて、その姿を見たとき私は一瞬何も考えられなくなったことを1年たった今でもはっきりと覚えています。その夜ホテルで大学を下見したときにもらった様々な部活やサークルを紹介した紙の中にたまたま労福会のピラを見つけ、

「すべての人が知らないふりをして通り過ぎているのではなく、あの人たちを支えているひとがいるのだ。」と少し安心してしまったのと同時に、大学に合格したら自分もこの会に入って出来ることをやりたいと思いました。結局この会の活動に参加させてもらうようになったのは去年の暮れ頃からなのですが、この短い間に私なりに色々と悩むこともありました。一つは当事者の立場に立って物事を考えることの難しさです。例えば夜回りなどで路上生活者の方に差し入れを渡すときに、「当事者の方が社会の厳しさもよく知らず、親の援助を受けて生活している学生から物をもらうときにどんな気持ちになるのだろう」とか、「私達はちょっとした気持ちでと思って物を差し出したとしても相手にとってはプライドを傷つけられる行為なのではないか」などと考えてしまい、差し入れを渡すたびに複雑な気持ちになります。その他にもう一つ、以前ある路上生活者の方に「会として活動しているときは私達に声をかけても、ひとたび会を離れて友達といるときには私達のことは無視するのだろう。」という言葉を受けて、確かに時によって当事者の方々に声をかけたりかけなかったりするというのはなんとなく矛盾していることのように思え、こんな中途半端な気持ちで当事者の方たちと関わっていていいのだろうかと考えさせられています。ですが私にも自分自身の生活があり、常に当事者のことだけを考えるわけにはいかないのどこかで線引きをする必要があるのかもしれません。ただ私には線引きが可能ですが、当事者の方々は自分たちの今ある状況から簡単には逃れられないということは忘れてはならないと思っています。

最後に、この会は多くの人々の支えによって成り立っているということが活動を通してひしひしと感じました。ですからお世話になっているすべての人に対する感謝の気持ちを忘れずにこれからも会の活動に参加させていただきたいです。

山内太郎（帯人大谷短大教員）

月日がたつのは本当に早い。札幌を離れて1年間が過ぎようとしているが、振り返ってみると一体自分は何をしていたのだろうと考えてしまう。しかし、一方で労福会は着実に動いていた、動いているんだなあと感じさせられていた。新たな関係機関との連携の広がりや旭川、函館といった活動地域の拡大などはもちろん、調査や企画の人集め、生保同伴でのやり取りなど、活動にほとんど関われなかった自分がいわゆる「労福会」を感じることができたのも、労福会がHPやMLなどを通じてリアルな情報をたえず発信してきたからだと思う。会の活動、特にメンバー一人一人の働きをどうやったらみんなで共有できるか、これは会の発足当初からの大きな課題の一つだったが、会の一年を振り返ってみるとこうした課題の一つ一つが着実に解消されてきているのではないかと素直に感じる。

翻って自分と労福会に関してこの一年を振り返って、と言われると、実際に何を書いたらよいものかと思ってしまう。というのも、恥ずかしながらこの一年でつくづく感じたの

は、会のメンバーと一緒に活動ができなかった、と言うより一緒に時間を過ごすことができなかった寂しさと自分にとって労福会（のメンバー）の存在が予想以上に大きなものと痛感したことだったからだ（勿論自分はまだ現役のメンバーであると強調したい）。こんなことをこの場で言うのはふさわしくないのかもしれないが、あんなに個性的で、熱くて、面白くて、心が許せる連中がいっぱい集まって、議論したり悩んだり、時には馬鹿笑いできたことは本当に幸せなことだったのだと思ったし、実は自分にとって大きなエネルギー源だったことをあらためて確認してしまったのである。

もちろん労福会が野宿者支援を行う団体である以上、ママゴトみたいな仲良しグループでことが済むわけではないことは承知しているつもりだ。そこには深刻な問題を抱えた人たちと向き合っていくことの難しさや一人一人ではどうにもならないように思える社会の矛盾に突き当たってしまうことは度々だと思うし、組織として運営していこうとするときの気苦労は並大抵のものではないと思う。しかし、そんな時とともに考え、行動しようとする仲間がいるんだということを感じることは大事だと思うし、労福会は感じるができる仲間がたくさんいるところだと思う。

山本 侑(北海道大学薬学部1年)

僕は去年の4月からこの会に参加しています。きっかけは、入学時の色々なサークルの紹介パンフレットの中に労福会のチラシを見つけた事です。それを見て「これだ!」と思った・・・訳では全然無く、なんとなく思いつきで見学に行ってみて、そのままなんとなく入会して、で、なんとなくズルズルと活動している、といった感じです。だから正直に言って、僕は会の中でも“労働と福祉”という問題についてかなり何も考えていない方の部類に入ると思います（笑）。

じゃあなんで一年も会に参加しているのか?という、とおおざっぱに言えば単純に“充実感”を味わえるからです。初めての同伴の時一緒に同伴したおじさんから「本当にありがとう・・・」と涙声で言われた時の気持ちや、普段生活していたらありえないだろうという位早起きして朝ピラを配った帰り道に「俺のやってる事って何なんだろう・・・」とぼんやり考えたり・・・なかなか普段は味わえない種の気持ちだと思います。あと、見ず知らずのホームレスのおじさんと話したりするのって単純に僕は好きです。まあ、“充実感”を“自己満足”と置き換えても大差無いと思いますが。

だからこんな僕がこの一年してきた事は、ある意味無責任で自分主体のものだったと思っています。世の中にはいろんな人がいるから、「そうは言っても相手にしてみれば生きるか死ぬかの問題なんだからお前みたいな奴がやるべきじゃない」と言う人もいます。そう言われたら今は何と云えばいいのかわからないです。まあそうなのかなと思います。でも、自分では、僕のように何も深く考えず、これといった目的意識もなくボランティア

ィアする人がもう少し増えても面白いんじゃないかなと思います。良いか悪いかはわかりませんが。でも実際そんな人ばかり集まっても“会”としては機能しないわけで、“会”の中核を担っている先輩がたは、周りの人達や僕のような無責任な奴をまとめて動かしていくのに大変苦労していたようです。本当にお疲れ様でした。

寺嶋祐一（北海道大学経済学部2年）

私は今年度、会計係りを務め中心メンバーの1人として活動してきました。その中で感じたことを以下に述べるのだが、これは労福会が学生主体のボランティア団体として活動を続けていく以上、考えていかなければならない問題だと思う。

労福会に限らずボランティア団体において、個人の自由は認められなければならない。各人は「やれる範囲」で活動すればよいのである。この「やれる範囲」というのが実にクセモノである。ボランティア団体において「やれる範囲」とは「自分がやりたいと思う範囲」だろうし、私もそうあるべきだと思う。しかし、現実には特定のメンバー、特に私を含めて役職に就いた人に仕事が集中し、私達はこの「やれる範囲」を越えて活動していた。私達にとって「やれる範囲」とは文字通り「可能な限り最大限」であり、多くの人のそれとは実にかげ離れたものだった。なぜ、このようなことが起こったのか。理由は以下のように考えられる。まず、私達が苦労をしているということをあまりアピールできなかったからである。私達が、どんな仕事があつて大変か、ということをもっと知らせるべきだったと思う。ただし、これを実行するには相当なエネルギーというか覚悟が必要である。目上の人が多いというのもあるが、最も大きいのは「あの人がやって当たり前」という雰囲気がかの会の中に存在するからである。これは私に限ったことではない。生保同伴の経験が豊富な人にもそうだし、事務局長等についてもそうである。労福会の活動がボランティア活動である以上、役職がある、経験があるからといって、「やって当たり前」ということはない。もちろん、たくさん活動している人がえらいというわけでもない。次に、活動を一旦縮小させる、あるいは仕事を休止するという発想がもてなかったからである。しかし、今年度に至るまで労福会の活動は拡大する一方だったこと、市民や行政からの期待や注目が集まっていること、そして何より会の活動に協力してくださる方、寄付をくださる方が大勢いることを考えるとこれも容易ではない。最後に、人手不足であると知りながら、人材確保のために力を注がなかったからである。たしかに新人生勧誘のピラを配ったり、学内に宣伝用ポスターを貼ったりと新しい試みはいくつかあったのだが、なかなか実を結ばなかった。しかし、だからといって諦めてしまうことなく、人材確保は粘り強く取り組んでいかなければならない課題だと思う。

以上、長々と不平、不満をぶつぶつ言ってしまったが、会の活動に参加することで貴重な経験をさせてもらったし、得たものも大きかった。安部事務局長をはじめ多忙な中、事

務作業等に協力して下さった方々に、この場を借りてお礼を言いたい。「特定の人物に仕事が集中する」という課題を「いつものことだ」で済まらずに、労福会が機能的な組織に成長するよう努力しなければならない。来年度の労福会が、個人の自由が尊重される、魅力的な組織になるように。

佐藤 学

「お久しぶりです」と言っても「コイツハ誰ダ?」と感じる方が多いのかな?

僕が何者か知りたい奇特な方はいつも素敵で南部先輩に聞いてみて下さい。え?、南部さんが「そんな奴は知らん!」と言ってる?、ひどいなあ南部さん。確かに僕は今年度は労福会に関われなかったけどさあ、昔はあんなに熱く語り合ったじゃない(ピーコ風)。

冗談はさておき、何処で混乱が生じたのか分かりませんが数日前に原稿依頼のメールを頂きました。依頼を断るほど気取った人間でもないのでも少し書かせて頂きます。

学生生活を離れてプー太郎なんぞをやってますと、「ホームレス」に関して耳にするのは「Big Issue」についてくらいでしょうか。みなさまには常識かも知れませんが、少し説明しますね。「Big Issue」はイギリス発祥の「ホームレス救済」を意図した雑誌です。著名人のコメントや時事的な記事を載せた雑誌を「ホームレス」が販売する。日本では一冊200円で販売され、売上の50%以上が販売した個人に還元されるというシステムです。

興味深いのは以下。第一に、その雑誌内容は大手出版社に「絶対売れない」と言われたにも関わらず、現在7万部以上が売れている点。第二は、イギリスは1990年代「ホームレス」で溢れかえっていたにも関わらず、現在「ホームレス」は激減し数百名程度でしかおらず、背景に「Big Issue」があるとも言われる点。これらを“信用すれば”ですが、「Big Issue」による「ホームレス」支援はいわば「ミラクルな一手」だと言えます。

例えば学生主体の労福会という立場から「ホームレス」の問題を考えると、とかく行政の取り組みに不満を覚えたり、あるいは学生自身の「やりがい」を満たすために過剰な負担を背負うこともありますね。例えば、札幌市では2004年度から「ホームレス自立支援事業」が開始されます。これに対して「まだ不十分だ」と批判することは簡単です。ですが、簡単な(怠惰な?)考え方の先には何があるのでしょうか。一部の学生のみが過剰な負担を背負うかもしれません。同時に慢性的人手不足が生じ、サラニサラニ……。おっと危ない!もう少しでヒネクレ者になるころでした。これじゃ何の進歩もないですね(詳細を知りたい奇特な方は過去の総会資料をご覧下さい)。

僕は、「労福会」の存在はとても貴重なものだと思ってます(ホントよ)。外から見ると、労福会は(あるいは行政も)よくやっていると思うんですね。だからこそ、今以上の何かを求めるのは「どうかなあ?」って思うんです。「やれることをやれる範囲で地道に

続ける」なんてあり方でもいいのでは、と。この考え方は、いつもクールな佐々木宏先生もよく口にしておられました。でも、ほら、佐々木先生の素敵な笑顔でさあ、「いや、いいんだよ、やれる範囲で」な～んて言われるとね、逆に「もっと頑張んなきゃ！」な～んて思ったりするじゃないですかあ（そう感じたことのあるあなた！、だまされちゃダメですよ）。

冗談はさておき、例えば、優れた小説が誕生する背景には、膨大な駄作が必要なように、先述した「ミラクルな一手」というのは生み出そうとして生れるわけじゃないでしょう。そうであるのなら、あまり気張らず、のんびりやって行くのもいいんじゃないかなあ…。僕は、今年度は活動に不参加でしたのでピントのずれた話かも知れませんが。う～ん、上手いこと表現できませんが、「語りえぬことには沈黙しなくてはならない！」とウィトゲンシュタインさんも言ってます（そりゃ違うか）。ともあれ、みなさま今年度もお疲れ様でした。来年度こそは活動に参加したいと思う、今日この頃です。おしまい。

新井 元規（北星学園大学社会福祉学部4年）

私が労福会の活動に参加するようになったきっかけは、卒業論文のテーマをホームレス問題に決定した際、ゼミの担当教授が本会を紹介してくれたことでした。初めて参加したのは今年の5月初旬、生活保護の学習会の時でした。学習会では生活保護制度の基本的な内容もさることながら、野宿者に対して実際には生活保護が福祉事務所においてどのように適用されているかについて熱く議論されており、「ホームレス問題に対してこんなに真剣に考えている人たちがいるのか」と感嘆したのを今でも覚えています。そして労福会の活動への参加が回を重ねるにつれ、民間支援団体である労福会の活動から、路上生活者への支援のあり方について大きな示唆を得ることができると実感するようになりました。

当初は卒論研究のフィールドワークとして労福会に参加したわけですが、実際に参加させていただいて、労福会の活動・理念はまさに社会福祉実践（ソーシャルワーク）であると実感しました。路上生活をするようになった原因に固執するのではなく、「路上での生活を余儀なくされている」という眼前の事実のみ着目し、脱路上につながるように支援する。この労福会の基本的なスタンスが、これまでの行政にはなかったのだと思います。そして、その結果が近年の野宿者の顕著な増加という「社会問題」となって表面化したのだと考えます。

個人的で恐縮ですが、私は自身の卒業論文のテーマを「野宿者への社会的支援に関する一考察」とし、サブタイトルを「労福会の活動を通じて」ではなく「札幌の民間支援団体の活動を通じて」としました。それはあえて「民間」という言葉を用いることによって、「公」ではなく「民」が路上生活者への支援に大きな役割を果たしていると思ったからです。そして実際に民間支援団体である労福会の活動に参加してみて、そうであると実感しました。

しかし、マンパワー不足の問題のように、「『民』だけで全てできるわけではない」と感じたのも正直なところだ。

だからこそ先駆的に路上生活者とのかかわりを重視した支援活動を行っている民間支援団体が行政に働きかけ、具体的なイメージを示しながらパートナーシップを築き、「公」と「民」で協働していけば、それが路上生活者への「社会的な」支援になるのではないかと考えました。その為にも、労福会を含めた民間支援団体の今後のより一層の活動の発展が期待されると思います。

最後になりましたが、労福会の活動に少なからずかかわれたことは私にとって非常に有意義なものでした。他大学の学生である自分を温かく受け入れて下さった労福会のスタッフの方々、色々な話を聞かせて下さった当事者の方々にこの場を借りてお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

「労福会とおじさんと私」

眞鍋千賀子

「私に望まれていることはふさわしい助け手となること」であったと思う。すべての人(わたくしも)は、いと小さき者でありすべての人間はふさわしい助け手を求めていると私は思う。いと小さき者と一緒に歩む。その人の人生の中に入って一緒に共感しながら歩む。人との関わりは疲れてひきずり廻されるが、何かより大きな存在が望まれていることを私は確信して、このボランティアの意味やよさを見い出している。同伴していて印象に残ることは、過去のその人の人生その時その時のことは出てこなくても今は出てこなくても、背負いこめる成熟した心が要るし、その同伴の短い時間の中に過去を生きて来たものが出てくるのである。そういう相手の存在にどういうものを求められているかをわかってそれを見つめて背負っていく。本当に助け手となることとは、本当にわかりにくい大変なことである。そして、又あるハンディがあったり病状が酷い時とかには別の対応がでてくる。ネットワークのありがたさがわかる時である。

反省会の学習ミーティングで、つながるつながりという考えさせられることができた。もしつながっていると感じている友人が、忠実でなくてわたしを裏切ることがあると、自分の中の何かが、壊れる。傷つく。今回私に始めてであったが、同伴している途中、労福会とおじさんの間に私はいて、"つながり"を会に願った。実際に手を尽した後、もう一度おじさんは雪の路上に見捨てられる状況になっていた。わたしたちは、他の人に迷惑をかけることを、どんなに嫌うでしょう。しかし、彼はしきりに訴えていた。だが、労福会は「答え」を出せない……と。このようになってわたしたちだったらどうするでしょう。私は、おじさんと労福会の間で混乱を感じ、それから悩みと孤独を感じた。ほんとうに僅かな小さな助けについて、話し合うことができなかった。

今は、多くの人がインターネットをつかう。マスコミや情報が氾濫しているので、わたしたちは人間の存在の悲劇を知りすぎる程知っている。私は欲求不満を感じた。それから一日かかった。前にフランクルの「意味を求めて」という本を読んだ。人の最も根本的問題は、特に動機の問題だと言っている。このことばがよみがえり、われにかえった。それは、より大きな存在が望まれていることを、素朴な心でまっすぐに行う、自由な心で行うこと。一日かかったが私は又自由さを味わった。これからも、おじさんが労福会との「つながり」を通過してつぎのステップを見つけて欲しいと思う。ちょっとしたキッカケでそのあとの生活が変わっていく可能性も少なからずあると今、又思う。おじさんが薄闇の中での生活をつづけられないように私は願っている。私たちからの声がけも一つのひかり (!) 皆さん、お互いにつながりましょう。助け合いましょう。

中山治光（北星学園大学社会福祉学部1年）

2月初旬、「夜回り」に始めて参加した。雨の振った日の夜8時から9時半まで、労福の先輩について札幌駅近辺をまわった。労福の活動に関らせてもらったのは去年の春から。しかし、「炊き出し」に3回出ただけで「夜回り」も「人数調査」もでていなかった。この夜会った60代後半の男性は一人ベンチにいたが、連れの若いのが内地から来てまだ冬の越し方がわからないからここにいるとわなしてくれた。知ってる建設会社に行けば働き口はある。都市を取っているから、若いより賃金を安くしてもらって少し楽な仕事をするんだとも。

ぼくも、若い頃、日雇い労働者だった。碎石場の解体現場で高い屋根に上がらせられ、わけもわからず立ち尽くしていた時、「いいから降りろ」と目配せをしてくれた人がいた。釘を踏んで飯場に帰り金槌で足裏の釘穴を叩いていた時、「古釘は気いつけんと」とマッチの軸のリンをつめで爪でこそぎ落とし粉にして親指と人差し指で釘穴のまわりを丁寧に囲んだあと、火をつけて消毒してくれた人がいたことを思った・・・。

冬の札幌で野宿をしている人がいることを、ぼくが知ったのは十年以上も前になる。それ以来、気になりながら何もしてこなかった。五十半ばで札幌に住み、労福の活動に参加させてもらっている。何かわかったようなことを書いているが、活動の場では迷う。この日の夜回りでも、札幌駅周辺の人々のなか、どの人が路上生活者か、半分はわからなかった。日雇いの頃、地下鉄の構内で目が合った野宿者がいっしょに働いたことのある人だと気づいても、声ひとつ掛けられなかったことがあった。路上生活者の前では、むしろ後ろめたさを覚える。

路上生活者はほとんどが男性だ。路上生活者の自立を支援するという時、「自立」、特に「男性の自立」とは何かと思う。例えば生活に関して、食事や掃除洗濯からゴミ出しまで、身のまわりのことを自分は最低限できているだろうか。仕事だけでなく地域の中でも、人との

関係をどうつくっているのか。また、自分らしく生きているのか。これらは、路上で生活するしないにかかわらず、広く男性に共通する課題ではないだろうか。ぼくは労福の活動に沿いながら、この辺りを路上で生活する人たちといっしょに考えていけたらと思っている。

藤堂美紗子（北海道大学文学部4年）

労福の活動を本当に面白いなと思うようになったのは、遅ればせながら参加から三年経ったつい最近のことです。それまではお金の計算をしたり、雑用係をしたり、それなりに楽しんでやっていたのですが、文字通り「できる範囲」でしか関わることはありませんでした。何よりおじさんたちの人生に関わるのが怖く、正直自分は中途半端ないい人としてのボランティアにとどまっていた。だから、どうして自分はホームレス支援のボランティアをするのか、他の人に説明できず後ろめたい気分を抱えていました。

そのような、自分にとって都合のいい位置—コンフォートゾーンから、抜け出すきっかけが三年目の夏の同伴でした。同伴したMさんの明るさに励まされ、自分はMさんにどんな最善のサポートができるのか、真剣に考え行動する勇気を与えられました。（Mさんからは半年後「自分で就職先を探し、自立した」という連絡をもらいました）そしてその後も同伴が不安でたまらない私に、同じボランティアの真鍋さんがアドバイスを与えてくれました。これらの出来事を通して私は、おじさんの自立への不安や葛藤を共有する勇気もちつつ、おじさんにとって最善の道をサポートし続ける、そんなボランティアでありたいと思うようになりました。そして、長い間「自分にできることはここまで」と規定していたのは、ホームレス支援に反対する私の家族のせいでもなく、私の大学の勉強でもアルバイトのせいでもなく、おじさんの不安や葛藤を共有する勇気を持たずに躊躇する自分自身の心であったのだと気付かされました。

おじさんのサポートをしていると、おじさんや役所の人に対していらだつことや、どう判断したらよいのか分からないことにぶつかり、自分の信条や生き方までもが問われます。自分とは全く異なる価値観を持ち、人生を歩んでこられたおじさんたちに驚くことは多々ありました。しかしその違いを理解しながら「さて私はおじさんにどうやって支援できるのか？」と頭をひねりおじさんと対話する。これは、自分のしっかりとした立場を持ちつつも相手を思う柔軟な対応ができるかと問うてくる、厳しいけれども極めて人間的な仕事であり、労福の醍醐味だと私は思います。

ただ、そんな魅力的な労福の活動に、私は最近学生として限界を感じます。人生経験の少ない、社会に出て働いたこともない若造が「おじさん、人生これからだよ、やり直そうよ」と励ましたり説得したりはできないと、同伴して感じました。やはりそこは市民ボラ

ンティアや先生たち、大人にしかできないサポートなのかなあ、と思います。実際、「学生だけではもうあっぶあっぶ」というのが今年度の課題として浮き彫りになっています。そういう意味で、支援者一人一人の支援のバラエティを生かし、支援者どうしの協力・共有体制をスムーズになるよう工夫したらもっと楽しんで支援できると私は思います。これは来年度ぜひ取り組んで欲しいです。

さて、私が大学生になってからずっとお世話になってきた労福ですが、今年で卒業になります。私は春から北海道を離れますが、労福の皆さんが悩みながらもよりよい支援を考え行い続けることができるよう、祈っています。また会う日を楽しみに、その日までさようなら。ありがとう。

本間 朋子

社会人会員として、労福会の活動に参加させていただき、1年半程が過ぎました。これまでの活動の中から、「労福と私」を考えてみました。

2年前に、所属しています職能団体の会報に同じ会員の芳賀さんが労福の活動に医師として参加されている様子を投稿され、それを読み即座に自分も参加したいと思いました。仕事をするばかりではなく、社会人として自分もつ関心事に積極的に参加したいと考えていましたので、特に躊躇することもなく労福会の門を叩きました。野宿生活者への支援を通して何が見えてくるか、基本的には、自分自身のあり方を考える事でもあったと思います。

労福会のメンバーと共に早朝、夜回り、炊き出しと相談会そして、生保同伴とこれまで労福の先輩達ががんばって切り開いてきた活動をなんとか、こなしている程度の私です。当事者の方とのかかわりの中から、考えさせられた事はさまざまありますが、その中でひとつをあげますと、言い知れない「孤独感」です。仲間同士で寝泊りする場所があったり、顔なじみになり、話をしたりしている様子があり当然仲間同士で情報が伝わり、労福会の事も知っていたりします。でもかれらの間においても人は人、安心して付合うわけではない事がある方から聞きました。荷物が無くなっても当たり前、数日経つとだれがどこに行ったかも知らないと。

生活保護の同伴でも、その方のそれまでの生活が洗いざらいにされる様は、自分だったらどうだろうと思います。しかし、そう感じているのはその時だけであり、私とて事務的な、なんとも冷たいかかわりしかもてていない事を痛感させられます。でも、メーリングで労福の仲間のかかわりを日々読むたび、これからも、いっしょにやって行きたいとあらためて思います。

今後、労福会の会としての運営とか行政とのかかわりとか、議論を重ねて前進させてゆきましょう。以上。

上西知子（北海道大学大学院教育学研究科博士課程 2年）

今年度は日程調整がうまくいかず、事務局会議の時間に別の研究会に出ていたり、炊き出しの時に、他の会に出ていたり・・・でした。そのような時 ML の報告は私自身が参加できなくても、その苦勞を伝えてくれて、その状況を共有することができ、本当に報告者の方々には感謝しています。

その報告の中で、区役所の人から〈疑問をなげられて〉来たという報告がありました。このようなことは私も経験したことで、私の場合は雇用主からでした。役所のいう疑問の主旨とは「誰でも連れてくるからには再路上化しないように（あるいは健康維持のために）引き続き訪問したり支援したりするべきでないか」というものです。引き続き関わるというのはそのとおりですが、生活を保護されるべき人の支援は本来行政の仕事であり、良い労働条件は雇用主の責任であるはずで、労福会は「路上生活者に関わり支援し続けること」はできても、行政や企業の責任を下請けのような形ではあるべきではないと思いました。これが〈言われなくてもやる。言われてもやらない〉という私のボランティア精神です。というのはボランティアの目的が〈今、ここ〉に対応する支援と同時に、生活保護を与えたり切ったりするだけの行政から、社会的な弱者を多方面から支えるような行政にそのシステムを変えていかなければならないと思うからです。

しかしこの〈疑問をなげられた〉報告をよく読んでみると、報告者も指摘していましたが、その背景に区役所の人々の閉塞感を見逃せませんでした。つまり路上者の本音を聞いて知らせてほしいといったような言葉からは、役所には路上生活者が解らない、掴めないという困惑さえ伝わってきます。又事実生保を受けた多くの人の中には身勝手な行動から区役所の係りの人を失望させる人もいます。怒りたくもなる。路上生活者を怒ればもう来なくなります。来なくなります。路上者は増え続けていて、社会から役所は非難されます。でもどうしたらいいかその決定的な解決策は見つからないのです。その行き場のない怒りが我々労福会に向けられるようです。解決策が見つからないのは、役所という今の行政システムが、路上生活者に関わり続けることができ、一人一人の状況の複雑さに対応できるものにはなっていない、あるいはそれが許されていないからなのではないでしょうか。

報告者は〈労福流に〉と書いていましたが、労福会独自の活動を行政や企業も含めて、出来るだけ多くの方面の人たちと協力してやっていければと思いますし、事実多方面の協力を得てきています。そしてとりわけ、当事者同士が協力し合う形で、例えば居宅に移った路上生活者同士の行き来や支援が行われるように、それを労福会が支援していくような方向性があればと考えます。このようにしながら、なにしろ粘り強く打開策を見つけていくことが大切かなあと、報告を読みながら考えました。

塩崎満子

市民として参加させていただいているものです。何人かの方の区役所への同伴をさせていただきました。今年度は生活保護の申請をとて受けやすいと思えました。(自立計画書を書かされたケースもありましたが・・・)

去年の10月19日に、市役所、保健所、区役所の保護課の方々がいらしての総合相談会となりました。そのため区役所の方にデータが配布されていました。このことが実現できたのは、札幌市の保護課の方々と事務局の方々が何回も話し合いを持たれてきたということと、市と椎名先生、佐々木先生、事務局の方々が何年も懇談会を持たれていらっしやっった積み重ねがあったからだと思えます。

安部 薫道 (北海道大学法学部3年)

総会前日の夜、皆さんが資料の印刷に奔走してくれている横でこの原稿を殴り書きしています。時間が無いので思うことを整理して書けないのが残念です。会の反省点である「事務局長のキャラ(計画性がない)」を反映していますよね(笑)。

さて、この一年を振り返って、よくもこんな学生らしからぬ「意味不明なことに」時間を費やしたなあと思えます。しかし、もし「意味不明なことに」関わらずに学生生活を、人生を終わっていたらと想像すると、恐ろしくて身が縮みます。

さて、実は総会前日の今日になって、といっても過言ではないくらい最近になって初めて活動に関わる自分なりのモチベーションが分かりました。総会資料の本文の随所に渡りかっこいいことを書いてきましたが、思うに僕には人並みの「やさしさ(正義感や愛など)」しかありません。しかし「やさしく」てもそうでなくても、社会に乗っかって生きている以上、役割分担をすべきだと僕は思います。その役割分担は、ある人は自然が好きなので環境問題について考える、とかある人は金が好きなのでうまい金の稼ぎ方を考えるといったものでいいと思います。僕はたまたま「労働と福祉を考える」チャンスにありつくことができたのでラッキーでした。路上のおじさんもある種の役割分担をしていると考えると、その機能を無化しないためにケアが必要だといえるし、反対に彼らが何も役割を果たしていないと考えると、機能してもらうためにケアが必要だといえると思えます。

大学3年間、まがいなりにも法律・政治学を学んできてようやく分かったのが「難しいことはよう分からん」ということです。しかし、「分からん人」はくよくよせずに自分でもできることを求めてひたすら前に進むしかないことも同時に分かりました。「前へ」というのをテーマに「分からん人」なりに考えたいと思えます。

最近は公的扶助の「説得力のなさ」に興味があり、その有効化に加え社会保険などもっとうまくやりくりすればうまくいくのではなどと考えています。学習会などで会に貢献できればと思います。ともあれ、皆さん、1年間サポートしてくださってありがとうございました。

9. 来年度の役員紹介

顧問 杉村 宏（法政大学現代福祉学部教授）

代表 椎名 恒（北海道大学教育学部助教授）

副代表 佐々木宏（北海道大学教育学部助手）

事務局長 高柳 晴香（北海道大学教育学部2年）

事務局幹事 山内 太郎（帯広大谷短大講師）

椎名 結実（北海道大学法学部4年）

諏訪 絢子（北海道大学法学部院生）

安部 薫道（北海道大学法学部4年）

山本 侑（北海道大学薬学部2年）

寺嶋 祐一（北海道大学経済学部3年）

松林 恵介（北海道大学医学部4年）

本間 朋子（市民の方）

眞鍋 千賀子（市民の方）

中山 治光（北星学園大学社会福祉学部1年）

塩崎 満子（市民の方）

来年度もよろしくお願ひします！

資料①2003年度夏・冬の人数確認調査報告～「札幌市内人数把握調査について」

南部 葵

はじめに

「労福会」が発足した1999年の冬以来、夏と冬の年2回、札幌市内にいる路上生活者の人数をカウントしてきました。私たちが支援活動が続けるなかで、その実態を少しでも知りたいという思いがあり、そのひとつの行動として、人数調査をあげることができます。どのような場所にどれくらいの人たちが生活しているのか、また季節や長期的にみた人数の推移がどの程度あるのか把握するよう努めてきました。

札幌の場合、特に冬期間は雪と寒さから身を守らなければならず、本州の都市などと比べると、「越冬」は命にもかかわる大きな問題です。しかも、札幌には一時宿泊所がないため、彼らは、屋根のついたバスレーンや地下街の入り口、橋の下などでダンボールの囲いを作り、風雨・雪をしのぐといった生活をしています。「労福会」の参加者が調査という形を通じて、こういった生活実態を確認し、社会に訴えていくと同時に、「炊き出し」や「夜回り」などの支援活動と結び付けながら、調査結果を生かしていく必要があります。

調査をするにあたって

これまでの経験から私たちは、札幌にはおおよそ100名近くの路上生活者がいることを知っています。さらに、札幌駅周辺と大通公園、ススキノに寝場所の多くが集中し、それ以外には豊平川の河川敷や地下鉄沿線、主な公園などでも確認されています。したがって、調査範囲もこういった地域に限定して行なうことにしました。また、調査開始時間も重要です。寝場所を中心に人数をカウントしないと、果たして路上生活者なのかどうかの判断ができないという難しさがあるため、調査の時間帯には注意を払う必要が出てきます。彼らは、寝場所によって違いはあるものの、たいてい朝は早く、駅や地下街が開く時間には、寝場所からいなくなってしまうため、薄明かりの中、かろうじて人数や性別が確認できる朝の早い時間帯に実施することにしました。

これらの条件を満たしながら、調査を行なうには最低30人程度の調査員が必要になります。早朝の調査のため、参加できる人たちも限られます。「労福会」のメンバー以外にも、「路上生活者問題」に関心のありそうな人たちに参加を呼びかけ、何とか最低必要人数を確保しているというのが現状です。しかし、さらに多くの人数が確保できれば、ススキノのように雑居ビルが建ち並んでいるような地域をより丁寧に調査ができるものと思われれます。

また、12月13日の冬の人数調査は、札幌市の委託を受けるという形で行なわれました。調査の実施要領を決めていく段階から、「労福会」と札幌市の間で話し合いがなされ、実際に市の職員も調査員として参加しました。調査手法等は「労福会」のやり方を踏襲しており、今後、行政が中心となって路上生活者対策が本格化するなかで、今まで「労福会」で培われてきた経験が生かされようとしています。

調査の方法と課題

主に2人1組になって各区域を回り、寝場所を中心に、路上生活者の人たちが集まりそうな場所を巡り歩きます。そして目視で（場所・性別・荷物・年齢などを）確認していきます。ただし、必ずしも、すべての人たちが決まった場所で寝泊りしているとは限らなく、一晩中歩いている人たちやどこかの建物の中に入ってしまう人たちもいるので、私たちが把握できない人たちも少なくないはずで、また目視のため、たとえ路上生活者であっても、見過ごしているという可能性も否定できません。この点を考慮すると、調査の結果から出された人数以上の路上生活者が札幌市内には存在していると考えられます。

夏調査結果 (2003年7月5日実施: 調査時間6:00~8:00)

合計 88 名

(調査場所)	(人数)
札幌駅・駅前バスターミナル	40
大通・狸小路	23
すすきの・中島公園	3
地下鉄南北線 (麻生・北24条・すすきの・真駒内等)	0
地下鉄東西線 (宮の沢・円山・白石・大谷地・発寒南・新札幌等)	6
地下鉄東豊線 (栄町・福住・新道東等)	調査中止
JR 沿線主要駅 (桑園・琴似・新琴似)	0
公園 (円山公園・真駒内公園・農試公園・美香保公園・月寒公園)	0
豊平川河川敷 (東大橋~ミュンヘン大橋)	14

冬調査結果 (2003年12月13日実施: 調査時間4:30~7:30)

合計 91 名

(調査場所)	(人数)
札幌駅・駅前バスターミナル	29
大通・狸小路	44
すすきの・中島公園	1
地下鉄南北線 (麻生・北24条・すすきの・真駒内)	1
地下鉄東西線 (宮の沢・円山・白石・大谷地・発寒南)	0
地下鉄東豊線 (栄町・福住・新道東)	0
JR 沿線主要駅 (桑園・琴似・新琴似・新札幌)	1
公園 (円山公園・もなみ公園・豊平公園)	0
豊平川河川敷 (北13条大橋~ミュンヘン大橋)	15

調査結果から

夏と冬では、全体の人数に大きな変化はみられず、1年を通じておおよそ90名の路上生活者が確認できました。これは、氷点下10度以下を記録することもある真冬の寒空のなか、夏と変わらない規模で野宿を強いられている人たちがいることをあらわしています。

区域別では、札幌駅周辺と大通周辺が圧倒的に多いことがわかります。札幌駅周辺の場合、駅前バスターミナルのバスレーンにそのほとんどが集中します。最終バスが発車したのち、ダンボールで風除けを作り、布団や寝袋で一夜を過ごします。夏場に限れば、駅南口や大丸デパートの周りにあるベンチで寝ている人たちもいます。大通周辺の場合は、屋根のついた地下街の出入口でダンボールの風除けを作り、数人のグループごとに別れながら寝ています。さらに夏場では、大通公園内のベンチでも寝ている人も数多くみられます。ススキノ周辺では、雑居

ビルの階段や空いているスペースで寝ているという話も聞きますが、それがどのビルのどこの場所なのか、はっきりしたことはわかっていません。そのため、今年度の調査でも、ススキノ周辺では、明らかに路上生活者だと思われる人たちをほとんど確認することができませんでした。河川敷では、北 13 条大橋からミュンヘン大橋付近まで、テントや簡単な小屋で生活している人たちがいました。しかしなかには、橋の下で布団だけで寝ている人もおり、冬の寒さに耐える厳しさは、私たちの想像をはるかに超えるものかもしれません。

私たちは、生活保護申請の同伴や体の不調を訴える人たちに対して、病院に入院させてもらえるよう、可能な限りの手助けを行ってきました。そして毎年多くの路上生活者が野宿の状況から抜け出してきたのも事実です。しかし、人数把握調査を行なうたびに、まだまだ多くの人たちが野宿の状態であることを目のあたりにし、粘り強く活動を続けていく必要性を再確認させられます。

今後、これまでの経験や集められた情報をもとに、路上生活者がいると思われる地域をより慎重に調査をすすめると同時に、調査参加者の人数の問題などが解決されれば、札幌の中心部から離れた郊外で生活している人たちがいる可能性をも探りながら、さらに積極的に調査を繰り広げていくべきかもしれません。寝場所や全体の人数がわかれば、「炊き出し」「健康診断」などの支援企画を充実させるうえで役立つばかりでなく、「夜回り」などを通じ、彼らに必要な多くの情報を提供することが可能になります。調査の方法も含め、より正確な実態を把握できるようこれからも工夫を重ねて参ります。

資料② 平成15年度 札幌市ホームレス生活実態調査結果（炊き出し・総合相談会）

- ・平成15年10月19日（日）ホームレス総合相談会時に実施
- ・%表示は、有効回答者（不明・未回答を含まない）に占める割合
- ・調査対象者数 39 ケース

1.性別

	人	%
男性	38	97.4
女性	1	2.6

2.年齢

20代	0	0
30代	2	5.3
40代	11	28.9
50代	15	39.5
60代	9	23.7
70代	1	2.6
80代以上	0	0
不明・未回答	1	
平均年齢	51.4	

3.現在の寝場所

都市公園	14	35.9
道路	0	0
河川敷	2	5.1
駅舎	12	30.8
その他	6	15.4
決まってない	5	12.8
不明・未回答	0	

5. 寝場所の作り方

テント・小屋常設	3	7.7
ダンボール	15	38.5
簡単な敷物	15	38.5
特につくらない	6	15.4
その他	0	0
未回答	0	

4.寝場所内訳

さっぽろ駅	4
大通公園	6
バスターミナル	2
地下街	3
階段	2
公衆トイレ	1
大学	1

6. 路上生活歴

1ヶ月未満	1	2.6
1～3ヶ月未満	10	25.6
3～6ヶ月未満	9	23.1
6ヶ月～1年未満	9	23.1
1～3年未満	5	12.8
3～5年未満	3	7.7
5～10年未満	0	0
10年以上	2	5.1
不明・未回答	0	

7. 現在収入のある仕事をして
いますか

している	8	20.5
していない	31	79.5
不明・未回答	0	

8. 仕事の内訳

解体作業	1
本集め	1
建設作業	2

9. 7で仕事をしている場合、ここ
3ヶ月くらいの収入

1～3万円未満	0	0
3～5万円未満	1	16.7
5～10万円未満	2	33.3
10～15万円未満	1	16.7
15～20万円未満	0	0
20万円以上	0	0
その他	1	16.7
不明・未回答	2	

10. ここ3か月で仕事以外の収
入はありますか

ある	6	16.7
ない	30	83.3
不明・未回答	3	

11. 10であると答えた人、収入の種類

年金	2
パチプロ	1
ひも	1

12. 10 であると答えた人, その収入
はどれくらいですか

1000 円未満	0	0
1000～5000 円未満	1	16.7
5000～1万円未満	0	0
1～3万円未満	1	16.7
3～5万円未満	0	0
5～10万円未満	2	33.3
10～15 万円未満	2	33.3
15～20 万円未満	0	0
20 万円以上	0	0
不明・未回答	0	

13. 路上生活をする以前の仕事
上の立場

経営者・役員	2	6.1
自営・家族従事者	2	6.1
正社員	11	33.3
臨時・パート	10	30.3
日雇い	8	24.2
その他	1	3
仕事をしていない	4	-
不明・未回答	1	

14. 13の仕事の内
容

	人
電気工	1
外壁工	1
ガードマン	1
サービス業	1
建設業	2
土木	4
製紙会社荷受	1
運送	1
公務員	1
自動車販売	1
自衛隊	1
パチンコ	1
運転手	1

15. 今回の路上生活をするようになった
理由(複数回答可)

倒産・失業	17	43.6
仕事の減少	3	7.7
病気等で稼働不能	4	10.3
収入減	1	2.6
ローンが払えない	6	15.4
家賃が払えない	9	23.1
ホテル・ドヤ代が払えない	3	7.7
建替え等による住居の追いた て	0	0
借金取立て	1	2.6
差し押さえによる立ち退き	0	0
病院・施設退所後行き先なし	3	7.7
家庭問題	8	20.5
飲酒・ギャンブル	4	10.3
その他	4	10.3
理由なし	0	0
不明・未回答	0	

16. 現在具合の悪いところがありますか？

はい・通院	1	2.7
はい・売薬	3	8.1
はい・何もしていない	11	29.7
いいえ	22	59.5
不明・未回答	2	

17. 1年以内に次のような症状がありましたか？
(複数回答可)

めまい	10	27
しびれ・麻痺	4	10.8
咳が続く	5	13.5
微熱が続く	1	2.7
下痢・腹痛が続く	2	5.4
かゆみ・湿疹	7	18.9
目やに・かゆみ	5	13.5
食欲不振	4	10.8
急激に痩せた	5	2.7
ひどくだるい	4	10.8
耳鳴りがひどい	1	2.7
吐き気・嘔吐・胃の痛み	4	10.8
むくみ	4	10.8
頭痛	4	10.8
腰痛	9	24.3
よく眠れない	4	10.8
その他	3	8.1
なし	13	35.1
不明・未回答	2	

18. 最後に医療機関もしくは健康診断を受診したのはいつですか

1ヶ月以内	2	5.6
3ヶ月以内	2	5.6
6ヶ月以内	4	11.1
1年以内	10	27.8
3年以内	11	30.6
3年以上なし	7	19.4
不明・未回答	3	

19. 自立支援センターがあれば利用したいとおもいますか？

利用したい	31	86.1
利用したいとは思わない	5	13.9
不明・未回答	8	

20. シェルターがあれば利用したいと思いますか？

利用したい	35	97.2
利用したいとは思わない	1	2.8
不明・未回答	3	

21. 今後どのような生活を望んでいますか？

きちんと就職したい	23	62.2
都市雑業的な仕事	1	2.7
行政の支援を受けながら軽い仕事	3	8.1
就職できないので福祉を利用	5	13.5
入院	4	10.8
今のまま(路上生活)	0	0
わからない	1	2.7
その他	0	0
不明・未回答	2	

22. 現在、就職するための
求職活動をしていますか？

している	21	61.8
していないし、今 後もしない	5	14.7
していないが、今 後する予定	8	23.5
不明・未回答	5	

23. (22で求職活動をしている場合)なぜ
仕事を探していないのですか？

今の仕事で満足しているから	0	0
疾病、障害、病弱、高齢で働け ないから	4	34.2
自分の希望する職業を探しても ないと思うから	0	0
保証人や住民票がないと難しい と思うから	1	9.1
その他	6	54.5
不明・未回答	2	

24. (23で求職活動をしている場合)
仕事はどのようにして探しています
か？

一般の職安	12	60
求人雑誌・新聞	6	30
知人・友人などからの情報	2	10
直接雇用主に応募	0	0
その他	0	0
不明・未回答	1	

25. どのような職種を希望していますか？

技能工・製造・建設・労務作 業	20	62.5
運輸・通信	4	12.5
農林漁業	0	0
保安職業	2	6.3
専門的・技術的従事者	0	0
管理的職業	1	3.1
事務	0	0
販売	0	0
サービス業	4	12.5
廃品回収業	0	0
その他	1	3.1
不明・未回答	7	

26. 就職するために望む支援はな
 んですか？(複数回答可)

就職相談・求人情報	19	59.4
就職訓練・講習	9	28.1
仕事先の開拓	7	21.9
事業主の理解	6	18.8
身元保証・住民票の設定	14	43.8
その他	4	12.5
不明・未回答	7	

27. 路上生活を始める前はどこで
 生活していましたか？

札幌市内	22	57.9
札幌市以外の道内	10	26.3
道外	6	15.8
不明・未回答	1	

28. ここ1年、家族・親族との連絡があ
 りますか

ある	9	24.3
ない	28	75.7
不明・未回答	2	

29. 札幌市内に家族はいます
 か？

いる	20	51.3
いない	19	48.7
不明・未回答	0	

30. 29の内訳

親	8
兄弟	11
子	8